

# 層富

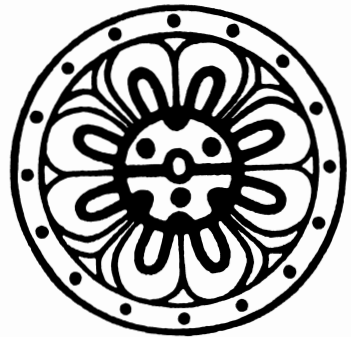
(川口勇書)

## 会誌名「層富」(そは・そふ)の由来

私たちが住んでいる平城ニュータウンの地域は、古代には「層富」または「曾布」「添」とも記され、「倭六県」(やまとのりくのあがた)の一つでありました。出典は『日本書紀』の神武即位前紀己未年の春二月壬辰朔辛亥(20日)の条にみえる「層富県」によりました。

題字もはじめ小さく、あと大きくしましたのは皆様の将来と本会の末広の発展を願ったものです。

古代大和の由緒ある地名を理事会の賛同を得て会誌の名としました。ご愛顧の程を。(網干善教)



## 会章

平城ニュータウンの「平」と文化協会の「文」を上下に組み合わせ、単純な円形にまとめ、音如ヶ谷瓦窯跡から出土の古代軒丸瓦の中央部分に配置したものです。蓮華の中の埴輪の顔のようにも、二人三脚で楽しんでいるようにも見えます。

(基本デザイン 朱雀・寛裕)



## 巻頭言

### 患者の一日

会長 網 干 善 教

普通の人でも四ヶ月も五ヶ月も入院するのはつらいものである。

そんなことはあまり体験したくないけれど、健常者であった私には長い日の入院は特につらい。

毎日、軽い床擦れや進まない食事にあきあきしながら日々を過ごしている。

思うことはいろいろある。将来のこと、仕事のこと、勉強のことどれをとっても天井を見たきりの生活ではいかんともしがたい。

ただ願うことは、早く元気になってまた皆さんとお会いしたい。

ひまにあかせてテレビやラジオのニュースを見る。朝から晩まで同じようなものばかりでつまらない。

子供の頃に怪我をした時に絆創膏を貼った。四〜五日経てば傷口がかゆくなってしまふ。今の病院もまったく変わりが無い。六十年たっても進歩がないようだ。

外は梅雨 人は暑いと 言うけれど 寝たきり患者は 知るよしもなし

窓を打つ 激しい雨は 夕立か 一度あびたい 今日この雨

東の 空ようやく 明るみて 鶯はじめ 鳥起きにけり

(口述記述)

## 「飛鳥の古代寺院の瓦」

奈良県立橿原考古学研究所 平松良雄

飛鳥には現在のところ十一あまりの古代寺院の存在が知られている。日本には五五二年に佛教が伝来した。仏教の器ともいべき寺院の屋根を葺くための建築部材が瓦であるが、日本には飛鳥寺造営のために百濟から派遣された瓦博士がその製作技法を伝えた。寺院造営が盛んになるにつれて、瓦の生産も活発になり、様々な瓦の文様が製作されるとともに日本各地に派生していった。

今回は最新の研究成果や研究の動向を紹介した。最古の寺院、飛鳥寺・豊浦寺や和田廢寺では素弁蓮華文が使用されたが、文様から「花組」「星組」に分かれる。飛鳥寺の瓦は大和国内で生産されたが、豊浦寺の瓦は備前、播磨、山城など遠隔地で生産された。また最古の軒平瓦

は坂田寺や法隆寺で発明された。吉備池廢寺ではじめて重弧文軒平瓦が採用され、これが山田寺に引き継がれてゆき、山田寺式軒瓦が成立する。一方川原寺では複弁蓮華文が採用される。これは唐の影響下にあるもので、川原寺式の成立によって百濟・新羅の様式から初唐様式の採用へと方向転換され、この後の軒瓦の主流となる。紀寺式も同じ影響下で成立した軒瓦といえる。

藤原宮が成立するとそこでは複弁蓮華文軒丸瓦と唐草文軒平瓦の組合せが採用され、飛鳥寺院にも大きく影響を与える。この頃には大官大寺が新たに造営される。一方飛鳥寺では玄奘三蔵の弟子、道照のために東南禪院が造営され、その専用の瓦も製作された。



平城遷都後は飛鳥において寺院の新規の造営はほとんどなくなる。ただ岡寺が平城遷都以前から造営されており、完成は奈良時代の半ばと見られている。岡寺式軒瓦は複弁五弁軒丸瓦と葡萄唐草文軒平瓦を組み合わせた特異なもので、山林修行の道場の専用瓦として製作された。寺院の建立はなかったが、修理は盛んで平城宮式軒瓦が各寺院で出土する。これは国家が寺院に対して瓦を与えて援助したことを示している。平安時代に入ると飛鳥の諸寺院は徐々に廃れていき、瓦の生産は少なくなる。川原寺は飛鳥に残された唯一の官寺であったので、各寺院に対して瓦を与えていることが平安時代の特徴である。

以上のように飛鳥の寺院の軒瓦を分析することによって古代の政情や佛教政策の実態を明らかにすることができ、現在発掘調査の増加に伴って資料数が増え続けているが、最新の研究動向を『続明日香村史』執筆のうちにまとめ、その成果をお話した。



## 「すかたん近衛兵」嘆き節

繪内正久

宮城入り三日目の朝を迎えた。八月十四日。太平洋戦争敗戦前日となる。この日もいい天気だった。手つかずの武蔵野原生林に覆われた宮城は静寂そのもの。ときたま賢所や大内山あたりで小鳥がさえずる。ときには鋭い奇声が静かな森をゆるがせた。

そんな聖域の中の守衛勤務は、戦争が激しくなつて24時間勤務体制に改められた。だから一昨日上番したわが近衛歩兵第二連隊の衛兵は本日下番、第一連隊と交代のはずだ。だが私が指揮する第九中隊の仲間二十人は、守衛隊ではなく武装した戦闘部隊だ。反戦平和を叫んで立ち上がった地方連隊と、呼応する政治家や学者集団など不逞の輩が、宮城に攻めこみ天皇陛下を人質に平和を強要しようという。この連中と一戦を交えるのが少数とはいえ、わが迎撃隊の重大使命だった。

そんな特命を与えられたわが隊に交代兵があるのだろ

うか。しかし交代の定刻をすぎても迎撃要員どころか、本務の上番守衛隊すら姿を見せなかった。軍律違反そのものだ。明治七年初代近衛都督西郷隆盛が近衛連隊を編成して以来、交代要員が来ないなど初めての一大事件だ。しかし天皇御一家の安泰、宮城内諸門、宮殿の警護などの総括責任者たる宮城守衛隊司令官（大隊長級）は、部下将兵に一言の説明もなく、平然と私にまで任務続行を命じた。

私の隊は二重橋の正門に対し、搦め手にあたる代官通り五番丁口の交通遮断と車両の監視任務を解かれ、宮中女官が集団居住する局門くまど警備に回された。一同キツネにつままれた感じだった。女官たちが住んでる場所は、宮殿と宮内省に囲まれた一角にある。女護が鳥とも呼ばれて、ふだん近衛兵は近寄れない。初めてわれわれが見参した。

古ぼけた木造平屋建てで、長い一直線の縁側に同じ間取りの小部屋がずらりと並んでいた。奈良市の元興寺や唐招提寺にある僧房にやや似ている。縁に面した障子ばりの室とその奥の一間が女官部屋で、身の回りを世話する小間使いの若い女性と同居している様子だった。彼女たちはこの長屋と、宮内省と宮殿の間をつなぐ百間廊下ひゃくけんかを毎日小走りで往復、御身辺で奉仕する。ちらりと見た彼女らは上品な顔だちの老女ばかり、家柄と育ちのよさを思わせたが淋しげに見えた。

そんな殺風景で清潔そうな長屋を庭先から縁側越しにのぞきながら巡視した。(何も起きそうにないじゃないか……こんな任務ならおれ一人で結構) 女護が島の興味も手伝ってこまめに回り、のんききわまる役目だった。しかし考えてみれば、われら二十人は宮殿にもつとも近い場所に陣を構えている。万一反乱軍が濠を越えてここまで攻めこんできたら、われわれが守りする最後の楯となる。(おれたちこそ近衛兵団の中でもつとも高峰に位置する光榮と名譽に輝く隊なのだ)

すかたんに似合わぬ高ぶりさえ覚え、局門をそぞろ歩いた昼下がり——突然わが第二連隊長が軍旗を先頭に全

將兵を従え、歩武堂々と乾門から入場してきた。総員完全軍装のもと、連隊旗を奉じて軍靴を聖域に踏み入れた行動は、これまた前代未聞だ。たちまち二重橋正門内に近い宮城守衛隊司令部の建物は、廊下まで兵隊で溢れ、入りきれない兵力は正門や坂下門の白壁の楼上に駆け上がった。それでも収容しきれず、残余の連中は内濠の堤防上や路上に銃を立て、折敷けの姿勢で一触必発の態勢をとった。

これらの主力部隊は一夜から今早朝にかけ、通常の軍務を中止して全員実弾を携行、国鉄中央線、山手線の要所に散兵壕を構築した。そのうえ連隊兵舎や疎開先兵舎から全員の私物、行李を残らず集めて焼き捨てた。その中には一級の軍事秘密の宮殿、賢所、御殿の所在、道路、門、内濠、橋、衛兵所の所在地などを記入した衛兵必携の宮城全図、御守衛守則、各衛兵所守則、近衛師団命令と回報、全員の軍歴簿、勤務誌、私物日記、写真、手紙をすべて含み、近衛兵の証拠物件を自ら消し去った。

午後三時頃、日本放送協会の役員、技術員二十名が急ぎ足で坂下門から入ってきた。同門警備担当の皇宮警士はなぜか姿を消し、代わって大勢の第二連隊將兵が立哨

していた。それをかき分け、放送機材らしい荷を宮内省に抱え入れた。しばらくして省の玄関前に重機関銃が据えられて、二重橋堤防上に大隊砲が配備された。砲口を広場に向けた。不気味に緊張感が高まるなか、静かに夕暮れが宮城の空を包んでいった。儀仗衛兵を延長勤務している第九中隊員は黙々と衛兵交代をくり返す。なぜ交代兵が現れず勤務延長になったのか、なぜ軍旗もろとも連隊長以下全兵力が軍装で乗りこんできたのか、なにも知らされていない。兵隊もそれを話題にしようとしない。

それどころか、正門儀仗衛兵司令を勤める第九中隊長さえ衛兵たちの知らぬ間に司令職を解かれ、姿を消していた。吹上御苑内の御文庫警備に回されていた。御文庫は御常御殿おつねご炎上後の仮宮殿となり、御一家が住む鉄壁の巨大大防空壕だった。皇族会議、閣議、戦争指導者会議もここで開かれていた。中隊長はそこへ出入りする皇族、大臣や侍従らの動静を探るため柔剣道の有段下士官十余人で見張っていたのだ。中隊長自身なぜ御文庫を監視するのか、理由を知らされなかった。宮城内の采配は陸軍士官学校出身の陸軍省軍務局、参謀本部、近衛師団司令一部の佐官級参謀および第二連隊の大隊長らが掌握した。

幹部候補生出身の二連隊将校は何も知らされず、職業軍人の命ずるままに動かされていた。ましてや小部隊の道路遮断の迎撃隊に、平和反乱軍が現在どこで何をしてるか説明するはずがない。情報も説明もないまま司令部内の空気は、時々刻々と緊張と不安を増していった。あわただしげに廊下を闊歩する参謀の姿を見つめて、休憩中の衛兵の口も重くなった。

一人で下士官室にいと、二・二六事件を何となく思いだした。寒い雪の朝、期末試験で都電渋谷駅から神田へ向かった。赤坂表町の電車通りにあつた大蔵大臣私邸前に二十人ほどの兵隊が屯ろしていた。赤坂見附にくると大勢の兵隊が走り回り、将校が大手を広げて私が乗った電車を止めた。陸軍省方面は通行不能、新橋へ行けという。夕方になると帰宅の途中、九段下で白だすきの将校にさえぎられ、新宿へ行けと路線変更を命じられた。四、五日後の帝都の空にはのんびり気球が浮いていた。車窓から見上げたら「兵に告ぐ」と幟が下がつて、反乱はあっけなく終わった。(あの時と似た感じだな……)、悪い予感も打ち消すことにした。(兵隊の身では考えたところで、どうにもならん……こんなときは明日に備えて

早く飯を食べて眠るに限る) 一個大隊の兵士を丸呑み

してごった返す司令部内で、私の膳は宮内省大膳寮で作られ、寝台の準備さえできていた。

どれほど時間がたったか、枕元でわが名を大声で呼ばれてとび起きた。

「捕虜をひっぱってきた。明朝処刑するから逃げぬよう見張りをつけてくれ」

九中隊の幹候将校だった。陸士将校の走り使いをしている様子だ。指示された司令部内の衛兵食堂へ行くと、十疊ほどの室内に二十人ほどの男が投げこまれていた。密閉された室内に防空カバーをつけた暗い電灯が一つだけ灯り、汗まみれの体臭と切迫した状況下で不安に脅えられた呼吸が異臭を放っていた。国民服やワイシャツ姿の民間人だ。兵用の木製腰かけに不安げな表情で机にうつ伏したり、頬杖をつく者、腕組みの老人もいる。反乱を企てる危険人物とは、とても思えぬ貧弱な体つきの連中ばかりだ。それにしても蒸し風呂のような暑さと耐え難い臭気だ。傍の不寝番要員に聞くと全員放送局員という。

「窓を全部開けろ」

たまりかねて兵隊に声をかけると、喜び勇んで三方の窓を勢いよくいっせいに開け放った。身元は割れているし、宮城内は兵隊だらけですべての門を押さえている。逃げられるはずがない。とたんに深夜の宮城の冷えきった新鮮な空気が、奔流のごとく流れこんできた。捕虜たちはいっせいに顔を上げ、生き返ったように胸を大きくひろげて、たて続けにあたりの空気を吸いこんだ。ついでに重たい木製の兵室の大扉まで押しあげた。廊下伝いに悪気が逃げて行くのが見えた。うれしそうに彼らの顔が一瞬輝いた。

「何をやらかしたんだ。この連中は……」

私の問いに兵隊たちは、第三大隊長に命令され、いっしょに宮内省へ行った。どうやら私が寝てる間に動きがあった。夜九時ごろだった。大隊長がいきなりレコード盤を探せと叫んだ。兵隊は灯火管制下、暗い電灯をたよりに三階まで各室の机の上を見て回ったが、それらしいものは見つからなかった。三階会議室の机上に放送器材やマイクが置いてあった。大隊長が軍刀でたたき壊そうとしたとたん、傍の老紳士が

「待ってくれ 頼む 壊さんでくれ……壊すなら先に

私を殺してからにしてくれ」

絶叫した氣勢に吞まれた大隊長一行は、そのまま引き揚げた。レコード盤搜索は十五日午前一時ごろまで四回にわたって、参謀たちの命令で行われた。どんなレコード盤か明確な説明がないままなので、兵隊たちも薄暗い室の中を真剣に探す気にならない。ついに放送局全員を捕えて尋問すれば、誰がどこへしまったか判明するに違いないとなった。十五日午前一時に近かった。昭和天皇が吹きこまれた終戦の詔勅の玉音盤奪取未遂事件の発端である。映画やテレビ、小説などで兵隊が白だすきをかけ、着剣した銃をひらめかしつつ侍従たちを脅し、室内を派手に荒らし回ったことになっている。だが迎撃要員や控え衛兵たちは初めて入る宮内省に勝手がわからず、足元も暗いので手さぐりで机上をなで回すのがやっと。銃など持たず丸腰と私に告げた。終戦四十年後の戦友会合の初会合の折だった。

捕虜たちの不寝番編成を終え、私はさっさと寝室へ入った。うとうとしかけた頃、突然軽機関銃の発射音が耳を打った。ハツととび起きたら朝の光がさしこんでいた。室内を見回すと誰もいない。再び連続発射音がした。首

相官邸の方向だ。(しまった。寝こんでる間に処刑してしまったのか) 廊下へとびだした。数時間前まで参謀や

兵隊でこつた返していた司令部内は、しーんと静まり返っている。玄関には打ち水がしてあった。横の司令官室に連隊長や副官の影もない。(おれ一人を置いてみんなどこへ行ったんだ……) 不安になってきた。連隊あげて反乱軍と一戦を交えるべく前線へ急行したものが。兵隊の姿を求めて、賢所へ向かう道を急いだ。うまい具合に迎撃隊の古参兵が前方からやってきた。

「みんなどこへ行ったんだ」

誰も起こしてくれなかつたので気が立っている。

「いま皇宮警士の詰所を包囲して武装解除してます」

近くの警士詰所へ行くと、大勢の兵隊が七人ほどの警士に銃をつきつけ裸にして、制服、帯剣、拳銃をとりあげていた。詰所内でも兵士が机や柵の中をかき回している。

「何をしてんだ」

「レコード盤を探してます」

「捕虜はどうしたんだ」

「けさ早く参謀が謝って解放しました」

そこまで聞いたとたん、(何かおかしいぞ……警士と近衛兵は同じような任務で、仲よくするよう教えられてきた。武装解除とは……ひよっとしておれたちが反乱軍ではないのか) 二・二六事件が頭にひらめいた。あわてて司令部へ引き返した。兵隊たちが三々五々どこからか帰ってきた。やがて兵士が大膳寮へ朝食を受けとりに行った。(われわれが天皇に弓ひいた賊軍とすれば、宮内省が賊軍に朝食を黙ってつくってくれるだろうか……) 疑問が疑問を呼ぶ。食事を終えて再び考えこんでいると、顔見知りの九中隊の幹候出の将校が、巡察に声をかけてくれた。

「これから、われわれはどうなるんでしょう」

三角門高射砲陣地まで来たところで、疑問にかまをかけた。みた。

「やはり腹切らにゃいかんだろうな」

しんみりと答えた。(やはり反乱軍はおれたちだったか……) やつとわが迎撃隊の十二日以来の行動と、昨日のあわただしい司令部内の動きがのみこめた。(そうならと連隊の先陣をきって、武装のうえ宮城へ送りこまれたわれわれはどうなるんだ……少数部隊とはいえ、指揮

者だけは将校と同罪になるのではなからうか……) 私の胸中を察してか将校は

「お前も腹切らにゃいかんだろう。将校も下士官もな  
い」

慄然といい足した。傷心の面持ちで正午を少し回った頃、司令部にもどった。目を泣きはらした兵士とはしゃぐ兵士がいた。司令部内は、きのうと違う空気があった。

「いま陛下のご放送がありました。戦争が終わりまして」

陽気に答えてくれた。私の気分は重い。(せっかく終戦で家に帰って復職できるというのに……おれは腹切りか) そこへ兵隊が同郷のつてをたどって各方面から次つぎ情報を入れた。

「きのうの参謀のうち二人が二重橋前広場の植え込みで、拳銃自殺してるのが発見されました」

「いま全将校が連隊の将校集会所に集まって、全員自決するか話し合っている。激高するもの、泣きわめくものもある」

「連隊長が侍従を通じ、陛下におわび言上したところ  
「もう、いい」とお許しがあつたそうだ」

「森師団長が昨夜、師団長室で参謀に射殺された。傍らの尋ねてきた師団長の義弟（広島・中佐）は首を切り落とされて即死した」

「阿南陸軍大臣が官邸で全責任を負って、今暁古式に則つて腹を切り、自刃された」

「連隊長が陸相の私邸を吊問に行かれ、そのまま免官となり郷里仙台へ帰られた」

「早く連隊に帰つた連中は、いまだんどん逃亡しているぞ。将校もまじつてゐる」

さすが衛兵たちは浮き足立つこともなく、将校が集会所へ向かつた後を下士官、兵だけで肅然と衛兵交代・立哨を定刻定則通り行つていた。私の隊は解散命令もないのに、とつと空中分解していった。私の傍には一人もいなくなり、情報集めに走り回つてゐるらしい。私の気は晴れない。誰の命令なのか、反乱軍のお先棒をかつがされて、何もせず寝ていても長という名の責任だけは問われるのか。怨めしいこと限らない。

さきほどから、ざわざわと汐騒のようなざわめきが聞こえていた。（何の音だ……）気分を紛わしに司令部を出た。ざわめきは伏見櫓にぶつかつて、宮城内に響きわ

たつている。さらに鉄橋の中ほどへ進んだ。右手の広場を見下ろすと、なんといままで見たこともない大群集がぎっしり広場を埋めつくしていた。さらに四方から二重橋めがけ押し寄せてくる。白砂の上に正座した人。平伏して首をたれたままの人。双手を挙げて万歳をする人。国民服にゲートル巻きの老人。モンペに白エプロンの若い女性。何かを叫び、泣きわめき、誓つてゐるようだ。合唱する一団も。のどを引き裂くそれらの声が混然一体大きなうねりとなつて、宮城をゆるがしていたのだ。

玉音放送が終わつてまだ二時間ほど。きのうまでは世界の列強を相手に戦う大日本帝国があつた。きょうはみじめな敗戦國に落ちぶれ、飢えと彷徨の大海に投げだされた哀れな人びとがいる。その迷える人たちの目が二重橋を見つめている。私は金縛りとなつて橋上に立ちつくした。緒戦の連戦連勝の頃、打ち振る提灯行列に応え、二重橋上からも静かに提灯を振り返す人影があつた。いまこそ悲しき迷える人たちを慰め、ふるい立たせる力強い応答が二重橋上からあつて、然るべきではないのか。忙しげに荷物を抱え、右往左往する橋上の役人を見ながら、反乱軍の一人として身の行方さえ定かでないのも忘



れ、悠長にそんなことを考えていた。この人たちへ再起の念波を届けようなどと柄にもなく、宮城の森が残照に映えるまで立ちつくした。

司令部へもどると防空カバーもカーテンもすべて取り払われていた。夕食を終え夜九時すぎ、近衛師団命令で第九中隊の下番守衛隊と共に、私たちも連隊兵舎へ帰ることになった。昨日は姿を見せなかつた第一連隊の上番守衛隊が、間違いなくやつてきた。電灯の下、初めて夜間の衛兵交代式がラッパの音と号令がとび交うなかで催された。敗戦第一夜の宮城に、ラッパの音がもの悲しく響き渡った。帝国陸軍最後の近衛兵として、天皇に弓ひく不忠の臣として、もはや二度と踏めぬ宮城蓮池通りを乾門へと向かった。途中二重橋の向こうに、丸の内のピルの灯がちらちらと見えた。夢のような夜景だった。

営門を潜ると向かいの第一連隊の兵舎は、消灯時間をとうにすぎているのに灯がともし、飲めや歌えの美酒盛りの最中だった。師団の食料倉庫にはまだ大量の米やみそ、酒、砂糖が山積みになって残っていた。占領軍に奪われるくらいなら、いまのうちに処分してしまおうという方針のようだ。一方、われわれの方には何の恩恵もな

く、交わす口数も少なく早々と寝られぬ床に入った。翌日からは将兵全員謹慎の営内禁足が始まった。最後の連隊長が着任してきた。私が供をした巡察将校は別れたその日に脱走したが、五日目に信州で捕まった。すべて内蜜で連隊に連れもどした。北海道や九州まで逃げた下士官、兵も咎めなしの特別扱いでおいおい帰営してきた。謹慎生活のうちに反乱事件のあらましが判つてきた。

阿南陸軍大臣の義弟（故人、後に防衛庁陸幕統合議長）らが中心となり、敵に一矢報いてからわが方に有利な終戦条件をつくって講和に持ちこむ作戦だった。そのためクーデターで優柔不断の鈴木内閣を倒して、阿南を主班とする決戦内閣をつくって天皇に翻意を促すという。阿南も義弟も近衛第二連隊出身なので、まず第二連隊の陸士出将校（大隊長）にわたりをつけた。それが八月十日だった。戦争指導者会議で天皇陛下が終戦へのご決意を示された直後だ。まさに思いつき反乱で、参謀でありながら根回しも無いままの無謀な決起だった。洩れたのは海軍省の電話盗聴からだ。それで事件を知った東部軍管区田中司令官（自刃）が宮城に乗り込み、十五日午前四時すぎ連隊長や参謀たちを説得。事なきを得て無事

に正午、玉音放送が行われた。

玉音は反乱鎮圧の数時間前の十四日午後十一時半、宮内省三階の会議室に金屏風を立て回し、鈴木内閣の閣僚下村情報局総裁、貴族院議員の大橋放送協会会長らが列立の下で行われた。二回吹きこまれ、二十分ほどでヘッドライトを消したままのご料車で、御文庫へお帰りになった。その一時間ほど前、近衛師団司令部の師団長室で森師団長が凶弾に倒れた。押しかけた参謀たちが近衛軍団の総決起を求め、東部軍の出勤を依頼したが承諾をためらったため、「第二連隊は立ちました。もう時間がありません」と拳銃を発射した。森師団長は日課の深夜の皇居巡察からもどった直後だった。

その最後となった師団長の巡察を目撃している反乱部隊があった。第二連隊第五中隊の一個小隊だった。同小隊は初めに賢所に布陣していたが、十四日午後御文庫の監視に回された。近衛兵は御文庫はもとより吹上御苑へも立入禁止だった。彼らは御文庫が目の前にある築山の陰にひそんでいた。十四日夜十時ごろ師団長が外庭東門から吹上御苑に入ってきた。そこに一個小隊の兵がいた。現れた小隊長が所属中隊名を名乗り、「勤務中異常あ

りません」と押し殺した声で報告した。このあたりが禁足地とも知らないのか、師団長は満足そうに

「引き続き十分警戒せよ」

と言いつつ残して闇の中に消えていった。小隊長も自分たちが反乱軍と知る由もなく、戦局異常の時だけに特別に天皇御一家を見守っていると信じていたのだろう。

この小隊はさらに師団長巡察の一時間前、御文庫のガラス戸を開け、天皇陛下がスリッパのままベランダから御苑の庭におりられるのを目撃していた。兵は池畔の雑草生い茂る中に銃を立て折敷けの姿勢をしていた。そこへいきなり人影が見えた。背に電灯の光を受けて、やや猫背がかった姿から陛下ご自身とすぐに気づいた。陸軍礼法で天皇の場合、皇族とも違う礼式の定めがある。兵隊たちは禁足地の特別任務と知って、どうすべきか迷いつつ、小隊長を見上げた。下士官あがりの小隊長も、どうすべきか体を固くしたままお姿を追った。声が出ない。いきなり大音声をはりあげ、草むらから小隊全員がとび出したら、陛下は仰天されるに違いない。目の前に居られるのを、知りながら欠礼するとは大罪に値する。進退きわまつて冷や汗が吹きだした。

陛下は何か思案中のようだった。うつむき加減に小道をゆつくりと歩まれる。どうやら行ったり来たりされてるようだ。幸い兵隊の姿にお気づきないらしい。ご思案中ならお心を乱すことになってはまずい。あえて欠礼しよう。罪はわし一人で負う。少し気分が楽になった。十分ほどで後ろ手を組みながら部屋へもどられた。兵隊たちはホツとしたものの、がっくり肩を落とした。草かげにひそんだまま見つめるとは、近衛兵にあるまじき行為と己を責めていた。それから一時間ほどして、陛下は室内灯まで消したご料車で宮内省に入り、録音された。その録音盤は侍従の粗末な布袋に入れ、木戸内府が金庫にしまった。

陛下が眠りにつかれてしばらくして、若い侍従が宮内省から御文庫に向かった。そこで草むらにひそみ、御文庫をうかがう大勢の兵隊を目にした。御苑内なので驚いた侍従があわてて御文庫に駆けこみ、入江侍従長に急報した。侍従長が小窓から外をうかがうと、銃に着剣した兵隊が御文庫を包囲している様子が見てとれた。早速、御文庫の出入口、窓の鉄の扉をおろして施錠、宮内省はじめ外部との連絡をいっさい断った。不安な一夜をすこ

したが、天皇は平常より三十分遅く七時近くにお目覚めになった。すべて鎮圧された後だった。第二連隊の事件を報告すると

「私が直接、兵に話してもよい」

ともらされたという。そして正午、ご自身の放送を宮内省内にある陛下の執務室の内廷庁舎で、ひとり静かに耳を傾けられ、ほっとした表情をされた。これは入江侍従長が生前公刊した「入江日記」を後日読んだその覚書きのあらましである。

さて八月ももう終わりに近い頃、宮内省から宮殿の焼跡整理に出動するよう、第二連隊に要請があった。もう宮城へは足を踏み入れられぬと覚悟していただだけに将兵の喜びは大きかった。久しぶりの宮城内はもとのままの風景と静けさの中にあつた。表宮殿の焼跡を掘ると溶けたガラス製品、置き時計、焼けたカーテンの端布、じゅうたんの残片、炭化した木片などが出てきた。午後も作業に打ちこんでいると、突然第三大隊長が

「気をつけーい」

よく透る声をあげた。驚いて周囲にいた兵隊が立ち上がり見回すと、陛下が侍従を一人連れて御常御殿のあた

りの焼跡に立つておられた。

「近衛歩兵第二連隊第三大隊、大隊長以下宮殿跡焼跡整備中でありませう」

鋭い甲高い声だった。侍従と熱心に話をしておられる様子で、答礼は無かった。一兵卒の敬礼にも必ず答礼され兵隊を感激させていたが、今は話に夢中と見え、体がかがめて焼跡を指さされた。そして静かに立ち去られた。ふと私は陛下の襟元を見た。カーキ色の陸軍の軍服に黒の長靴を召されていたが襟章がない。そこには陸軍大将の金筋が入った階級章が輝いているはずだった。それが外されている。だが私たちは兵舎に住み階級章をつけ、絶対服従の生活をまだ続けている。(ひよつとして軍閥をつくり、政財界をまきこむ相克から戦争へ突入した軍に不快の念をお持ちの現れか……私たちがご意志に反した反乱軍とご存じでは——) いろいろの思いで作業を続けた。兵隊たちは気づかなかつたのか、襟章のない軍服を話題にする者はなかった。

(陛下は軍人がお嫌いだったのでは……) という私の思いは、そのまま残った。半世紀以上たった今でも早々と階級章を外され、もはや軍隊式の答礼をされなかつた

お姿を思いだす。それから陛下にお会いできたのは十年後、地方巡行を取材したときだった。陛下の真後ろに立つて手にした帽子に目がいった。出迎えの群集に高々と振られた例の中折れ帽は灰色で、点々と脂がしみこんで黒くなっていた。黒いリボンも手垢で薄汚れていた。お人柄がしのばれる帽子だった。軍帽よりもお似合いだと思つた。

余談だが、終戦の八月十五日早暁、私が監禁を命令された放送局職員にまじつて、下村海南・情報局総裁がいた。下村さんは昭和三十一年夏の週刊朝日に、徳川夢声との対談「問答有用」の中で「捕まって狭い部屋に入れられ、暑さも手伝つて息苦しくなつた。そのとき下士官が窓を全開にするよう命令、自らも分厚い入り口の扉をうちわ代りに開閉させて新しい空気を送りこんでくれた。生き返つた心地がしてほんとにうれしかった。ぜひ会つてお礼がいいたい」と語り、夢声もうなずいていた。また下村さんは自著「終戦秘史」の中でも、「あの下士官に会いたいと、厚生省復員局に探してほしいと頼んだが、見当たらないという返事だった。読者の中にご存じの方はぜひご一報を……」と書いておられた。そのとき

下村さんは朝日新聞社にもどり重役だった。直ちに週刊朝日に連絡を入れた。すぐ「会いたい。都合のよい日時を教えてほしい。同じ朝日の人間とは奇遇」とはがきをいただいた。同じ社でも東京と大阪に離れて日程を考えているうち二週間がたった。その朝の紙面に下村さん急逝の新聞記事が目に入った。お会いしていれば当時の話をいろいろ聴かれたのに——と、いまま残念の思いだ。



〔付記〕

なお、近衛歩兵第二連隊の戦友会「近歩二会」では同隊が反乱を起こした事実を現在も認めていない。反逆とか、天皇の御意思に反したり、弓を引いた事実はないとの立場をとっている。年一回の定期大会でも元大隊長の同会幹部が会員に説明会や講演会を催し昨夏の文芸春秋社の戦後60周年を顧みる特集にも寄稿して訴えている。しかし日本近現代史学者で千葉大秦郁彦教授は、私たちが武装して宮城へ入った昭和二十年八月十二日を以て第二連隊反乱勃発の日と自著に私の官姓名入りで発表し、学界でも反乱の事実を認定している。

〔終〕

【写真説明】

近衛兵の写真は、終戦前日、私物を一切燃やされてありません。徳島連隊当時のものが、わが家にあつて唯一残ったものです。

NHKが昨年八月十五日60周年特集として、衛星ハイビジョンテレビ103チャンネルに使われたものです。(写真説明は本文の筆者)

短歌

年年歳歳

石井光子

師走の朔<sup>サツ</sup>鈍色の空に烏舞う日暮も早くなにか気忙し

首かしげ哲学者のごと木に止まる鶴に残せし千両実赤し

朝食後新聞ひろげゆったりとコーヒーを飲む今日のはじまり

大仏殿柱くぐりをやつと終ゆ外つ国婦人に拍手のおこる

根尾桜膨らむ蒼美わしく静かに仰ぎ千代女史偲ぶ

如月の風

大浦 小枝子

空の色くだけで小さき花となり地上に咲きゐる“おほいぬふぐり”

一茎に六つ花持つ水仙は一輪差しに縄張り主張す

垂仁陵の周濠の水干上りて冬の晴天はるかにつづく

睦月射す光やさしと露の臺覗けば寒し如月の風

此の国の放送文化は極まれり朝より料理の番組つづく

## 足病みて

岡田越子

足病みてこれという事なけれども手伝ひくるる夫のやさしき  
しつとりと雨に濡れたる庭見つつテレビの前にて過す連休  
足病みて散歩に行けぬわれを見て不思議顔する犬のかわゆき  
足病みて人のつらさをわれ知りぬ杖つく人をじつと見つめる  
痛き足ひきざり孫の発表会ピアノうまく弾き涙あふれる

## 半夏生の朝

木庭和子

半夏生の花穂形よく垂れたるを鶴首の花器に活るる半夏のあき  
青き空にま白く屹立マツターホルン あげし歓声耳に鮮らし  
三度めに叶ひし喜び全身に彼の日の君は子供に還りて  
世界遺産テレビに見つつその場所に共に立ちたる旅の思ひ出  
年毎の習慣ならひとなりしバラの花今年は無くて淋しきバース・デイ

## 榆の花びら

玉置小代

セビアの鈴懸すずかけの道にイースターの行列つづく黒衣まとひて  
宮殿への坂道に舞ふ花びらを榆にれの花と知りてそつと拾ひ来  
コルドバの「花の小径」の傍らに子を抱き物乞ふ女性に出会へり  
城壁の街に渡り来し鶴コウトリが翼ひろげて巢を守りゐる（アピラ）  
反戦の叫びを描きし「ゲルニカ」を見終へて街に仰ぐ空青し（ピカソ作）

## 初音

中野真智子

薫風と行き交う人の挨拶に犬と散歩の楽しさ知れり  
懐かしや何年ぶりの声聞きて友の十八番おはこは佐渡情話  
寄せ合いて池に戯る水鳥に陽射し暖か別れの日近し  
突き抜ける飛行機雲を眼で追えば五臓六腑もふと軽くなり  
公園の子等の声消えて夕げ時外とう灯り帰りを照らす



## 連翹の花

馬場恭子

今年また花をつけたる連翹れんぎょうは冷たき雨にも耐へて咲きゐる

桜より雪柳しゆりゅうより早く咲き連翹の花は春をよびくる

どの花も下向きて咲く連翹は春の初めの黄が清々し

採血のどくどく流るる注射器が赤く染まるをいとしく見つむ

やうやくに名前を呼ばれ診察室の椅子に坐りて医師の顔読む

## よしの

福光貞子

お一日ついで起こされ参りた吉野のお客今は誰ぞが祈りて住まうや

地下たびを履きて吉野の野良仕事白衣無くとも寸暇は女医に

朝顔の棚を造りて涼を呼び夏の憩を楽しませし人

のり巻きを十本巻きて遠足の前夜の準備夜明けの歓声

消し炭を継ぎたしく小て暖をとり夜は一つの炬燵が嬉し

## 春の陽だまり

松村 せつ子

シクラメン水仙パンジーさくら草好みの花を植えて春待つ  
春がすみみモザの黄いろ鮮やかにそこだけ明るし春はたけゆく  
過ぎ去りしかの日かの人懐かしき春は別れと出会いの季節  
金魚鉢のめだかの水を替えをれば二人暮しの日日癒される  
穏やかに優しくなりし夫と居る何もいらぬ春のひだまり

## 夏の憶い

森田 陽子

“冬来たりなば春遠からじ”の古語思う 入院準備の手を休めつつ  
病癒えし喜びに満ち紅濃ゆき花海裳の若木を 植うる  
大連の池畔の合歓ねむを偲びつつ平城山の地に紅き蕊しよ 踏む  
公民館の苑庭に咲く紫のアカパンサスの炎暑に燃ゆる  
恙無く文月古希を迎う身の“天恩 人恩 地恩”を憶う

---

## 水掛お不動さん

安田和子

ホツコリと埋もれているらし遠き日の父におわれし背なの温もり

豈にやさし母上様にうらみごと言いて甘えたし夢違ひ観音みれば

亡き姉の面差しに似る京人形今年もひっそりと難段のよこ

法善寺の水掛お不動さん草衣重おもと召す皆の苦の分

人間は目に入らぬらし枝垂れたる桜のもとに風流な鷺

秒針

茄子根付く雲居の鳥の唄ふこゑ  
十葉や杖に打たれて匂ひだす  
明易し麻痺の手足に骨ありぬ  
浮雲の影田植女をとらへけり  
夜濯や踏んで叩いて柔道着  
布袋さん涼しく紅絹の座布團に  
流木の逆立つてをり囀鳴く  
ふくろはぎしめて杖引く雪の道  
餅花や秒針震へつつ刻む  
節分の夜の畳に杖をつく

牧野和代

昔の僕

春光に膨れて眠る路地の犬

指先の芯まで苦き摘菜かな

かますごのつの字への字や酒肴

Y字路の右も左も花吹雪

アマリリス路地に昔の僕がいる

岩田 禎彦

笑顔

野遊びの妻の笑顔も三回忌

風鐸のかんからかんと二月かな

一村を包んで霧の静かなり

冬枯れの奥に誰住む藁の屋根

湿原に影を落して秋の雲

上田 善次

夏木立

岩田 久代

當麻

故上田 千代子

積雪に街のリズムが遅くなる

初音聴く雑木林の朝かな

家の内やわらかくなる木の芽時

賀茂の宮馬いななけり夏木立

苧麻からむしの葉裏ひるがす青田風

網戸よりまつ青な風入れにけり

洗濯機汗の匂ひを廻しをり

一と刷の雲ゆつたりと今朝の秋

予後の身を余白のごとく寒きびし

門川の音も當麻の冬はじめ

夏木立

病室のカーテン越しに梨もらふ  
口ひらく鯨に似たる春の雲  
お涅槃の足裏にそつとふれし旅  
木の芽風心地よき坂のぼりけり  
足早の僧消え去りし夏木立

早苗

病院の窓の下まで田植かな  
雨を受けそよと微笑む早苗かな  
翡翠色光りて甘き豆の飯  
夕餉終え団扇片手にうとうと  
秋冷の奈良町歩く襟立てて

岡 良子

うたたね

草餅やほころびを縫ふ白き糸  
草いきれしんがりも着く古墳道  
赤子泣く窓いっぱい雪ぐもり  
離乳児のためらひ口で小豆粥  
用ひとつ為してうたたね梅雨曇

紫陽花

大野 佐知子

紫陽花の鮮やかな青買ひにけり  
雨あがり若葉のしづく輝けり  
公園の水面にゆれて花満開  
駅の隅青磁に臘梅たつぷりと  
木犀の香に振り返りつまずけり

周 藤 智子

高 柳 孝子

駒鳥

立石和恵

割れ石にあふるるのじのすみれかな

駒鳥のひんからからと誕生日

螢火や闇より浮ぶ友の顔

はったいの香り追ひつつ路地の中

早桃もぐ枝を引きよせ祖母の笑み

木の实

西田 たまみ

花の雲城門に立つ由緒書き

流鏝馬やぶさめの綱の張られて祭待つ

雨音がやがて一つに大夕立

ままごとに厭いときし座敷の木の实みかな

北風きた吹くや顔に目あり耳ありて

国栖奏

藤澤慶子

作務僧に掃かれ消さるる蟻の列

散り敷ける朝あしたの花に靴の跡

種蒔きの足跡月に残し去る

国栖奏を見て自ずから吉野弁

ドレミファソ山家の軒の吊し柿

嬰の重み

福井 佐知子

一枚の木の葉さ、めく冬日向

冬の蕃薇塀の隙間に犬の鼻

春泥のこれより急なけものみち

葱坊主嬰の重みが腕にあり

なら山のくわつと明るき山つつじ

# ゲループからの便り!

## 歴史教養講座

松岡 禮一

四月十二日↓「飛鳥古代寺院跡研究の動向」について

のお話。

・大官大寺は天武天皇の時代の677年に高市大寺から改名した、とある。当初の寺の所在所や高市大寺の建立について謎が多い。もっと研究する必要がある。

・そして、そのお話の後、法隆寺の国宝の「玉虫の厨子」は、もと橘寺にあった、と言うお話があった。

五月十日↓「香芝市の下田東古墳」と「高松塚古墳

の文化庁案(石室解体)」についてのお話。

・「香芝市の下田東古墳」から、靫と弓を持つ人物の埴輪が出土した、という発表があった。靫と弓を持つ人物の埴輪の出土は、全国で始めてである。

同市一帯は、豪族の葛城氏が権力を振った所である

から、葛城氏の武力を知る上で有力な資料である、と思われる、と言う。

・「高松塚古墳の文化庁案」では、解体は1・2月頃が良いと言う。又、その解体の手順も発表された。(四段階になっている)。又、現状の緊急対策として冷気を通す事も検討している、との事である。

六月十四日↓「高松塚古墳の修復と保存の問題点」に

ついてのお話。

・「飛鳥美人の眠る古墳」として長年親しまれてきた明日香村の高松塚古墳。それが、十一日に開催された文化庁の「国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策検討会」は、石室解体へと進んでいるようである。

・地元では、「専門家が言うのなら致し方がないけれども……」と、あきらめのような気持ちを持つようになっているが、一方では、「保存については村に任せて欲しい」という考えの人もいるようであるから、それらの人々のご意見も大切にすべきである。



七月十二日↓「高松塚古墳の石室の解体が決定された

こと」についてのお話。

・「国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策検討会」は、○  
七年一月に石室を解体することを決定したことを、  
文化庁が了承した。

・壁画を石室の外に取り出して、修復するというが、  
情報公開も不十分で、議論を尽くすことなく、それ  
でよいのであろうか。疑問が残る。

・「壁画は、やはり古墳の中に残しておくのがよいよ  
うに思う」とのお話。

九月十三日↓「高松塚古墳の白虎のカビ」についてのお話。

お話。

・「最悪のシナリオ」が現実になった。

・予想された事態であり、人災としか思えない。

・文化庁の責任は重大である。このままでは、国宝の  
壁画と、特別史跡の古墳の、両方を失ってしまう可  
能性もあるように思われてくる。

十二月三日↓「大安寺西塔」についてのお話

・七重塔をしのばせる基壇跡が発掘された。

・国内最大の風鐸が出土し、大安寺の全容が、ほぼ明

らかになった。

(付記)

平成十八年一月から三月まで、網土先生の、  
ご都合により休講になりました。

## 先史学講座

堀口 千秋

泉先生の先史学講座が始まって八年目に入りました。  
縄文土器を主に多方面にわたる先生の博識を少しでも吸  
収しようと、老いの頭を鞭打って毎回出席しています。

四年余り、奈良を留守にした間に講座は進み、今は、  
「Whose Past?」という英語の原書をコピーしていただ  
き、世界の遺跡に関する考え方を学んでいるところです  
が、英語の授業からウン十年離れた身には、原書はチン  
パンカンパン。ただただ先生のお話に耳を集中させるば  
かり。

その中から「遺跡とシンボリック」という話で「地域の  
アイデンティティと遺跡の関係」を少し探してみよ  
うということになりました。

「遺跡を使った国旗」に始まり「マンホールの蓋」に及び、これを文化祭に展示したらどうだろうといったところまで発展しています。たかがマンホールの蓋と思いますが、これがよく見ると、とても美しくその地域の色が如実に現されていて興味深い代物です。

インターネットを駆使したり、足とデジカメで確かめたり、「マンホールを考古学的視点で見ると」意気込んでいます。

京大に移られてバリバリの現役先生。海外も飛び回られるお忙しい中、熱心に指導してくださるお姿に、感謝の念とご健康を念じております。

## 読書会

片岡 圭子

本を読むのは楽しい。同じ本を読んだ人達と集まってお茶を飲み、お菓子を食べて、おしゃべりするののもっと楽しい。自分の好みの作家の本でなくても、読んでみて良かったと思う時がある。

良かったというわけではないが一昨年、大江健三郎の

「取り替えっ子」という本を皆で読んだ。

評判通り彼の文章は難しかった。完読する人がなかったの、来月、もう一度持ち越して読んでみた。でも理解しにくくて、つまづいてしまいました。

このように、一人では手に取って試みるのではない本でも、皆と一緒に読んでみる。これも読書会の良さであります。

こんな気楽なおしゃべり好きの読書会に、参加されませんか。

毎月第四金曜日午前10時～12時。

右京ふれ合い会館。

### 十七年度、読書会の活動

四月八日 伊賀上野へ文学散歩 講師 松岡禮一先生

五月二七日 「珍妃の井戸」 浅田 次郎著

六月二四日 「海と毒薬」 遠藤 周作著

七月二二日 「王国への道」 遠藤 周作著

八月二六日 「遠ざかる祖国」 逢坂 剛著

十月二八日 「不安の力」 五木 寛之著

十一月二五日 「春の雪」 三島由紀夫著

一月二七日「吉野葛」谷崎潤一郎著を読んだの講演会  
——奥吉野のロマン——

講師 浅田 隆(奈良大学教授)

二月二四日「伽羅の香」 宮尾 登美子著

三月二四日「白道」 瀬戸内 寂聴著

### 英語講座 (初級・中級)

高松美枝子

毎週月曜日午前中の英語講座、いつもの十四五人のメンバーが集まってくる。もう四年も続いているこの英語講座、橋本友子先生の丁寧な講義が始まる。聞いてもすぐに素通りしてしまう私の頭の中では、ただ席を温めているだけだと思いつつも、それ程欠席する訳でもなく続いているのは、教室の楽しい雰囲気にあると思う。

現在古典落語を英訳したものをテキストに使っているが、最後の落ちに全員爆笑ということが度々で、そこから脱線して世間話になることもあり、そこには長年(?)生活の中から様々の事を培ってきた女性達、話題にこと欠かないのだ。

そして私のお気に入りには英語の歌だ。「明日に架ける橋」「ラブ・ミー・テンダー」「ダイアナ」等、若い頃うろ覚えで歌っていた怪しい歌詞も、こういう単語が連なっていたのかと、新鮮な驚きを覚えたり、今年度の歌「慕情」等では、「愛はすばらしいー早春に育つ薔薇のような…」等と、橋本先生の詞的な訳で解説されると、まるで若い頃に戻り、少女のように感動している自分がいるのである。

又この英語講座、教室の中だけでなく、野外でも楽しむ、ということになり、春には近くの公園でお花見を楽しんだ。桜はもちろん美しかったが、やはり、「花より団子」ワインで乾杯となり、手作りのつまみに舌鼓を打ち、その程好い酔いに誘われて、日頃の歌も飛び出した。ホロ酔いで歌う「イエスタデイ・ワンス・モア」の何と心地好いことか。発音の悪さなど何のそのグラス片手に、高らかに、美声(?)が桜の木々を通り抜けた。

◇

◇

初級では、中学一年からの基礎を学び、中級では先に挙げた落語を読み、訳し、文法も適度に入っている。そしてリスニングも毎回繰り返し行っている。テープは幼

児向けの教材だというが、四、五回聞いても私などは完全に聞き取るのはかなり難しく、普通の方法の速度の会話を聞き取る事がいかに大変であるか、毎回痛感している。しかし、「継続は力なり」という言葉を信じて、これからも続けていくつもりである。

◇

◇

いつからでも、どこからでも、身につけただけでもうけもの、と思つて始めませんか。待つています。

## 絵画の会

大台 雅生

身辺雑記

### 絵画教室周辺

大台 雅生

○ 会員が増えないのは、世話人のせい

絵画の会の世話人を引き受けて三年目になりましたが、懸命に努力した心算なのに会員が一向に増えず十二名から現在の六名に半減いたしました。

この二年間に大きく変わった点は会場が無料から有料になったこと、それに伴つて会員より月千円の会費の徴収が従来と違います。

支出の主な項目は会場費で北部会館の文化ホールでは多目的室が一回三時間で二千四百円と高く、月二回の例会は相当の負担になっておりました。そこで考えたのは二階の老春の家の会議室を借りることで使用料が七分の一の三六〇円に激減いたしました。

勿論、老人福祉センターですから六〇歳以上の高齢者が利用することが前提になりますが、絵画の会のメンバーは全員が該当し思わぬ高齢化の恩恵を受けております。セルフですがお茶の準備もされており極めてアット・ホーム的で、それに若い職員の皆さんが親切でとても気持ちよく過ごしております。

さて、肝心の例会のレッスンですが、室内では静物写生が主となりますが、二年前よりモデルを招聘して人物描写も取り入れて、新しいジャンルの挑戦も積極的に展開しております。

ヌード・クロッキーや衣裳デッサン等すっかり例会に定着したようです。春秋の野外の写生会は古都奈良では



### モデルさんを囲んで

選ぶのが困るぐらい豊富に存在し写生地に事欠きません。ただ、お天気に左右されるのが野外の写生の泣き所で、当日の朝の判断にいつも苦慮しております。今年より当日は会場も予約してすぐに切り替えるよう手を打ちましたので、臨機応変に対応出来るようになり助かりました。

入会についてごく稀に教室に見学にとられることもあり、電話での問い合わせもあり「大事なお客様」ですので、できる限り親切に丁寧に説明をして対応しておりますが、入会まで漕ぎ着けるのは残念ながらありません。お名前やご住所を聞き出そうと、執拗にするのが訪問販売のセールスマンのように敬遠されているのかとも反省しております。

元公務員あがりで見、慇懃を装っても内心は高慢で尊大な雰囲気、世話人としても裏目に出ているかもしれません。当面、現メンバーを死守しこれ以上減らさず、長期的には一〇名前後の会員獲得に地道に努力したいと考えております。

○ 独創か、模倣か

最近、美術界を大きく騒がしたニュースは文部科学省主催の芸術選奨の洋画部門で受賞した洋画家のY、W氏の作品がイタリア人画家の作品と酷似しているとの盗作問題です。当のW氏は六六歳の現役作家として活躍している人物です。昨年、一〇月の美術雑誌でW氏の作品を紹介している記事を見ると、〃天性の卓抜なデッサン力に加え、長年にわたるヨーロッパでの古典絵画の技法の習得を基底にした確かな造形力で……近年美術界で評価も急上昇の屈指の実力者である。……生気を放つ女性像やドラマの一場面を思わせる臨場感に満ちた作品は、奥深く香り高い珠玉の作品である。〃とある。

同氏は過去に東郷青児美術館大賞、河北倫明賞などを受賞し、昨年は三重県、茨城県、東京都の公立三美術館で個展を開催するなど話題の活躍を展開している画家です。

分別の六六歳のプロ作家が偽作、盗作と誰にも直ぐわかる作品を國の芸術祭に出品し受賞して騒ぎになるなど困ったものですね。テレビで弁明しておりましたが歯切れが悪く到底納得できないものでした。

画家生の場合、泰西の名画の模写や手本として書き写すことはありますが、W氏の場合は大家といってもおかしくない経歴の持ち主がそのような疑いをもたれるのは芸術家として致命的なダメージとなりましょう。

昔からアーチスト(芸術家)か、アルチザン(職人)か、と両者の定義に論争が別れるところですが、かりそめにも芸術家を自負する作家が他人の作品を無断で〃剽窃〃するような行為はアーチストではありません。芸術家に最も求められるのは、創造、独創性、平たく言えばOriginalityの有無が問われます。

社会派推理作家として戦後の一時期を風靡した松本清張の作品群に画壇の内幕を描いた〃贋作〃という短編があります。高名の大家の作品ばかりを贋作していた青年画家が、ついには自分の絵が描けなくなる悲劇がテーマとなっております。

自ら作り出す長い努力と苦闘の末に見事な作品が開くもので、芸術家はその試練を乗り越えて自己を確立するものでしょうね。

○ 多作か、寡作か

文化勲章を受章された女流日本画家の小倉遊龜さんが一〇〇歳近くでも毎日、二時間程、必ず机に向かって習作を続けておられる様子をテレビで拝見したことがあります。

先日、教室を見学にこられた木津町のT氏とお話する機会がありました。一〇年間水彩一〇号の作品を千枚描いたと語っておられました。作品の一部を見せてもらいましたが、克明に描きこみ色彩も丁寧でおそろく仕上げに二、三時間を要したと思われます。週に二枚、一〇年間続けられた根気はなかなか真似ができないと感じました。

絵の描くスピードは個人により様々で、クロッキーなどはモデルを一〇分足らずで描あげますが、展覧会に出品する一〇〇号の油彩の作品には、二、三月かかるのも珍しくありません。

たとえば個展を開く時は最低、四、五〇点の作品を用意しておかねばなりません。普段から心がけて準備しておかねば急には間に合いません。

去年、画友のk、Aさんが心齋橋のギャラリーを借り

て念願の個展を開きました。同氏の場合、二十年間こつこつと描き溜めた作品を集めて展示しております。すでに馴染みの作品も何点ありました。

近代日本洋画家の鬼才、佐伯祐三の遺作の殆どが死の直前の一年間、パリで描いたものといわれており、その数は二百点に及んでおります。

僅か三十歳の若さで異郷の地で愛する夫人と幼い愛娘を残して死に向かう佐伯が、不安と絶望の日々の中で創作を続けた彼の絵画に対するすざましい執念が、後世に残る多くの名作を生み出したのでしよう。

○ 展示の機会に恵まれる

さて、絵画の会ではグループの展示会がここ一年間で四回、開催できました。昨年この十一月の文化協会主催の文化祭出展、今年三月の北老春の家主宰の作品展、四月のすすらん館の新装展、五月の北部図書館の四〇日間の常設展示と続き、メンバーの作品が発表の機会に恵まれ大いに気を吐きました。

絵を描く者にとって作品が展示され多くの人々に見て頂く機会に恵まれることは限りなく喜びと励みになります。

す。そのことが次の作品の創作につながり、創作への意欲になります。

さらに今年八月、再びずらん館の中央シヨウ・ウインドー一ヶ月の長期展示を予定し、出品の準備をしております。

これらの企画は文化協会の大黒柱、山内梅乃事務局長の八面六臂の采配によるもので、会場、場所の提供、関係者との交渉、調整等々はすべて引受けて頂き、私たちはそのレールの上を走つたに過ぎません。でも、絵画の会のささやかな展示でも文化協会傘下の同好会活動の一端を、いくばくかPRできたのではないかとひそかに考えております。

末筆になりましたが、同好会活動に親身のご支援に対して、山内局長はじめ事務局の皆様へ深甚の感謝と敬意を払うものでございます。

## 万葉集講座

岡田 越子

平成十七年で、『万葉集』講座は十七年になりました。

先生の『万葉集』の講義のテキストは、普通の『万葉集』の解説書や色々な講座のテキストとは大分違っているように思われます。テキストは、先生は自分で作成されている事は勿論ですが、とてもユニークです。内容については、以前この紙上にて紹介されました通り、解説文、原文、通訳、語訳になっています。そしてその後に、注や参考や先生の批評が付いています。それがとても面白いのです。殊に長歌の解説の形式は、今までに見たこととはない四段階に分れた形式の解説文です。

そこで、今日は、十一月に勉強しました、聖武天皇に従駕した笠朝臣金村の長歌と、その変わった形式の解説のサンプルを掲載したいと思います。しかし、原版は「B4」の用紙を縦に使用しておりますから、この「層富」に掲載する事はできません。そこで、その一部分を縮小して掲載します故、実物を想像して見て下さい。

この長歌にも【注】や【参考】が付いています。これ





らの原版も「B4」の用紙を縦で、上下の二段組です。今日はその【参考】も、その長歌の後に掲載します。

【参考】 1

◎作者は、笠 金村。

◎三十七句の長歌。(六十位)

【参考】 2

◎内容が、どうも、わかりにくい。

◎感情が、行きあたっては曲がり、やっと進んだと思つたら、又、直角に曲がってしまう。掴みどころのない歌です。

—— 私には、このように思われました。

◎胸に浮かんできた【情】と、そして口に出てる【言葉】とが、チグハグになつてしまつていのように思われてなりません。

代作という事で、張り切り過ぎた結果、このような「長歌」となつたのかも知れません。

こういう様に、親切、丁寧に説明して下さる上に、テキストは、ご自身でコピーして、皆の分まで持つてきて

下さるのです。

講議の途中での脱線は、これまた、とても面白く、時には、字画のお話があつたりして、楽しい勉強です。

皆様、一度おいで下さい。

## 俳句入門

牧野 和代

十七年度の俳句入門は、三名の入会者をお迎へして楽しく和氣藹々と進んでいる。

毎月発行している「ならやま」も、西田たまみ様のご努力によつて、七月号で第百六十五号の発行となり、會員の足跡をしっかりと残している。

句会では、時どきハツとさせられる句に出合うことがある。そんなとき、私の心臓は高鳴り、脳細胞は強打されたような刺激を受けて興奮さめやらぬものがある。

このように一句の中に感動させられるものがほしい。そのためには、あちこち吟行することである。そこで、ジーと良く観察する。同じ場所でも同じ物を見て十句〜二十句位つくる。この辛抱に辛抱を重ねていく間に、『見て

いて見えてないもの、聞いていて聞えてないもの」即ち、本質が、奥深いものが見えてくる、聞えてくるのである。

甲

西山佐代子様（十七年七月十八日逝去） かねてから療養中のところ薬石の効なく他界された。大ほらかで屈託のないお人柄に、母に抱かれるような思いでした。

上田千代子様（十八年一月二十三日逝去） 当日電話でお話しさせていただいた。サンタウンでの買物を楽しんでいらつしゃったのに、入浴中に召され、あっけない別れであった。

謹んで、二霊のご冥福をお祈り致します。

俳句の魅力

（初心者ですが）

岩田 禎彦

縁あって牧野和代主宰の句会に、妻ともども参加させていただいたのが昨年11月。まだ駆出しもいまいとこころで、この間自分なりに感じた俳句の楽しさ、魅力のいくつつか

を記したいと思います。

俳句は原則として十七文字を使い、季語を用いる等、最初は窮屈な感じがするが、創意工夫を重ねるにつれ、それなりの自由さも得られるようになり、「足るを知る」心境になります。自分の精神領域やくらしを豊かにするヒントが得られます。

また俳句は何時でも何処でも作れます。風景や対象物に語りかければ、語り返される何かを感じる様な気がし、句作りを始めるまでは、体験でできなかった濃蜜なひとときを持てる喜びを知りました。

景観や事物の表面でなく本質を、それも、一つでない本質を見ようという句作りには、前述の事項とも相俟って前頭葉の劣化防止には抜群の効果を発揮しそうです。

このように俳句は、優れて楽しいものですが、句作りにはそれなりの苦勞もあり、私自身は句会（月一回）では毎回汗顔の至りというのが実態です。

少しでも、俳句に興味をお持ちの方は、どうぞ気楽に句会を覗きにおこし下とい。

## 中国語講座

辻中 修

私は、当文化協会中国語同好会の応用クラスに入れていただいて中国語学習を続けています。早いものでもう三年になります。

意思の弱い私は、何か刺激や拘束がないと直ぐに怠けてしまいます。これまで十年以上もNHKラジオ中国語講座を受けてきましたが、あまり成果は上がりませんでした。幸い同好会では、NHKのラジオ講座のテキストを教材として学習していますので、私にとっては最適です。また変化の激しい中国では言葉の変化も激しく、辞書にない単語も多くなっています。NHKのラジオテキストは新しい内容や単語が取り入れられていますので一層有難いと思っています。同学の方々も皆さん中国大好きの人ばかりで木曜日にお会いするのが楽しみです。

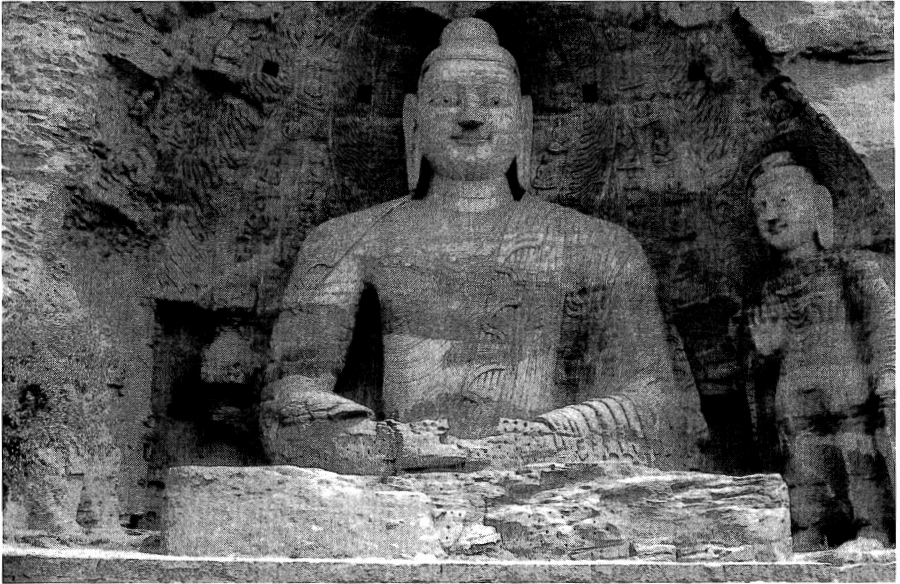
中国語の学習は検定試験三級合格が目標です。外国語の学習は集中して取り組まないと学習の効果は上がりません。進歩がなくても、せめて後退しないように続

けているのが現状です。

話は変わりますが、天津育ちの私は、昨年五月、天津日本人国民学校同窓生の天津・北京訪中団の旅行に参加しました。天津で生まれた弟も同行し、弟が生まれ育った家を見せてやりました。

帰途、訪中団の皆さんと別れて山西省の大同雲崗石窟を訪ねました。父親が六十年前に記念写真を撮っている石仏の前に立つことが目的でした。折りしも北京や上海では反日デモが盛んな時でしたが、列車では車掌室の隣のコンパートメントがあてがわれ服務員はとも気を使ってくれました。同室の中国人とも話ができて楽しく過ごせました。五月は、黄塵万丈の季節も終わっていて快適な季節でした。

大同は北京の北西三二八Km、内蒙古への入口に位置しています。古くから軍事上の要所で、石窟の断崖の上には明代雲崗堡の遺跡が残されています。また蒙古各地の物資の集散地として栄えた都市であります。現在、石炭の産出地として中国近代化の一翼を担っています。大同を訪れる旅行者大多数派のお目当ては大同雲崗石窟です。大同には飛行場はあるようですが、定期便がないので列



——大同石窟第二十窟——

車の旅をよぎなくされます。北京西駅午前十時発の特快軟座に乗り大同着午後四時四十五分、六時間四十五分を要します。北京から四百Km足らずの所にありながら大同への観光は二泊三日の日程を要するためになかなか実現できなかったのです。万里の長城で有名な八達嶺辺りでは、ディーゼル機関車が前進後退を繰り返しながらの峠越えでした。車窓からの風景の移り変わりも航空便では味わえない風情のあるものでした。大同駅には中国国際旅行社のワゴン車と日本語の分かるガイドが迎えに来てくれています。そのままホテルへ直行し、その日は移動のみの旅程でした。

二日目は、いよいよ雲岡石窟の観光です。石窟は大同市内から車で一時間ほど。ガイドブックによりますと、雲岡石窟が掘削されたのは、西暦四百六十年北魏が大同に遷都した頃である。大同の雲岡石窟は、敦煌の莫高窟、洛陽の龍門石窟とならんで、中国三天石窟に数えられ世界遺産に登録されています。

私が、これまでに拝観した敦煌の莫高窟は、砂漠の中によくもこれだけ多くの石窟を掘り進めたものだという驚きと、色彩豊かな壁画の見事さでした。また黄河畔に

穿たれた洛陽の龍門石窟は、石仏彫刻の優美さと数の多さでした。しかし、残念なことに文革等で多くの仏像の顔面が破壊されていて痛々しい限りでした。

これらに比して、大同の雲崗石窟は、壁面を埋め尽くす千仏と彫刻の美しさでした。とりわけ第二十窟の大仏は、高さ十数mで雲崗石窟を代表する芸術性の高い像です。東山魁夷画伯をはじめ多くの日本の画家が描いています。加えて、私にとっては、亡き父が六十年前にこの像の前に立つて写真を写したのだという思いが胸に迫りました。

午前中半日で石窟拝観を済ませて、午後は、他の大同の観光地、懸空寺・木塔・九竜壁等を回り大同観光を終えました。

帰りは大同発午後十一時十八分発の夜行寢台特急を利用し朝七時頃北京西駅に到着。北京では、上海での知人や同僚だった中国人との再会もでき、いい旅ができました。

ガイドがいなくても旅行会話程度ならできると思っています。中国では鉄道乗車券が買にくいことや、タクシー料金を掛け値されること。ホテルの料金も旅行会

社を通す方が安いこと。予定の日程通りには観光しにくいこと等が現状だと思えます。中国旅行は、旅行社を通してガイド付の旅行をするのが最も安全で経済的だと思えます。

これからも中国語能力検定試験三級合格を目指し、諦めずに続けて行きたいと思っています。

## 写真同好会

寺島りくお

写真同好会は、結成から十三年になり、私が入会してからも七年になります。当初、五〜六名だった会員数も三十二名になりました。

ただ、会員が二十名いれば、十のクラブが出来ようかと言うほど個性豊かな芸術家集団ですので、まとまって毎月の例会、月一回の撮影会、随時の作品展などの活動をするのは難しい作業です。

会員の中では、年下の私が代表を務めるのも、私であれば言いたい事が言えるし、年長者をたてて、意固地になつて分裂することがないとも言えます。

残念なことに、ことし、諸般の事情で文化協会を脱会することになりました。私自身は所属のない文化協会会員ですが、今日まで写真同好会をご指導いただきましたことを、とても感謝いたしております。

今後は、高の原写真同好会として、今まで通り地域に密着した活動を続けて参りますし、学研都市センターと親しくさせていただいている関係上、ずずらん館での写真展で作品を見ていただくこともあろうかと思ひますので、引き続きご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

ありがとうございます。

## パッチワーク研究会

管 千尋

パッチワークを始めて幾年になるのかはつきり覚えていない。今までにこれといった大作は何一つ出来ていないが、自分なりに出来ること、古布を使った袋物やメガネケースなど、ちりめんの手触りに満足している。

ずっと前、カンボジアアンコールワットへ旅した時、同じツアーの仲間が私の持っているポシェットを大変お

気に召したとみえて、何度も何度も触ってみたり、肩にかけてみたりするので、そんなに好きならと、旅の終わりの日に差し上げたら、夢かとはかり喜んでました。因みにその作品は私の処女作でした。

どんな小さな布切れも大切に作る心や美的感覚、手先の器用さを身につける手芸として、今後も布に遊んでもらおうと心がけている。

皆様どうぞおいで下さい。

## 銅板レリーフ同好会

谷口早智子

現在こうして、銅板レリーフに参加させて頂いているのは、六年前に展示会で、山崎明様(亡)との出逢いで、いろいろと説明を聞き、素晴らしさと、珍らしさに入会して親切に指導して頂き、お蔭様と感謝しております。又皆様方、各々が大先輩なのに、とても親切で優しく本当に楽しい雰囲気の中で接し、いろいろとアドバイスを頂きながら有難く幸福者だと感じています。私は未熟者でなかなか納得の行く作品とは云えませんが、これか

らも頑張ろうと思っています。

現在男性六人、女性二人ですが、銅板レリーフ作品に素材を選んだり、又自分で書いても良いし、長男には頼まれて私の自筆で表札を作りました。

銅版は厚さ0.1mm、構図に合わせて切り、その上にカーボン紙を載せてトレーシングペーパー（構図を写したものを）を載せて裏から鉄筆で銅版に写しとり、その後銅板にヘラと割箸の先を丸めたものなどで、表からと裏からと立体感を凹凸を出し、天候の良い日に銅板をジフで磨いて洗って、（入浴剤）ムトウハップと水と、又ぬるま湯を容器に入れて銅板を入れ、その後、水で流し洗い、乾かして、透明ラッカを吹きつけて仕上げをする。液の量、浸す時間、磨き方で、随分と作品の出来が違ってきます。又思う様に出来ないけれど又楽しみでもあります。

第一、第三、金曜日、午後一時〜三時迄。平城西公民館にて、どうぞ見学にお出下さい。地区内の方の入会をお待ちしております。





## 『古文書』を読む会

大槻 順子

開講されて丸二年にならない新しい講座ですので、会の雰囲気をお知らせしようと思います。

「古文書を読む会」というと、古くて、カビ臭いものを読んで、陰気な人間の集まりのように思われるかも分りませんが、リーダーの石川さんと、いつも傍らに居て、にこやかにアドバイスをして下さる花田さんという良き先達に恵まれて、楽しく勉強させていただいております。

石川さんと「さん」付けで、本当は、「先生」と申し上げたいのですが、一昨年十月、開講の折に、「教員をしていただくのではないので、先生といってくれるな、リーダーと言ってくれ」とおっしゃったので、そのように申し上げております。この一事をとってみましても、会の雰囲気は、お分かりいただけたと思います。

リーダーの御話で、会社員を御退職後、古文書の勉強を始められたということをお聞きして、その御努力ぶりに驚き、とても真似のできることでないと思いましたが、リーダーの、明るい御人柄に、御話が面白く、二十

人余のメンバーで、和気あいあいと勉強しております。

メンバーは、年令も職歴も、とりどりで、古文書を読むことについても、専門的に経験のある方、他の講座で勉強してこられた方、全く初めての方等、レベルもまちまちです。

初めてでも、「読めなくて恥をかいた」というような思いをせずに、今日まで来られたのは、リーダーをはじめとして、メンバーの皆さんの人柄のお陰だと思えます。

テキストにつきましても、版本の読み易いものから、町方、村方の文書、武家文書、書状と、リーダーが、私達のレベルや興味を考えて、準備して下さっています。

当然のことながら、古文書を読むということは、ただ文字を読むということだけではなく、歴史的な出来事、社会の仕組み、当時の人々の生活や文化など、様々なことが分り、初めて知ることが多々あって、とても楽しいものです。

私自身は、博物館等で催される展覧会にいきましても、文書の所は、読めないものですから、素通りし、奈良には、歌碑等石碑が沢山ありますのに、何と書いてあるのか分らず、歯痒い思いをしておりましたので、少しでも

読めるようになりたいと思い、入会しました。安易な切っ掛けで入会し、牛の歩みのような状態ですが、多くの楽しみに引かれて、勉強していききたいと思っております。

## フォークダンスの会

馬場 恭子

フォークダンス！。何という懐かしい響きでしょう。フォークダンスの手をとれば甘く匂うよ黒髪が、小學生時代を想い出す人も多いでしょう。しかし近年これが健康の為にとても良いということで中高年の女性に大人気です。平成ニュータウン文化協会にこの会ができて五年が経過しました。今まで順調な活動でしたが本年度は宮川先生の御身体の調子が優れず、なかなか一つの曲をスムーズに最後まで踊りきることができなかつたり、また会場の問題や会員のメンバーの入れ替りがあつたりと困難なことに直面しました。しかし先生から教わつたフォークダンス愛好者のマナー十ヶ条を頭の中にもち、なんとか続けていくことができましたように思います。

フォークダンスは協同のスポーツで単に一人だけが上



手くても成り立ちません。フォークダンスのルールとして参加者が一人一人心の中にいつでも持つてほしい対人関係のマナーがあります。

- 一、フォークダンスの雰囲気は協力する
  - 二、パートナーの信頼を裏切らないよう努力する
  - 三、ひっこみ思案、出しゃばりも度をこすと不快
  - 四、順序よりまず用語を覚えよう
  - 五、自分と相手をおきかえて考えよう
  - 六、会の役員に協力しよう
  - 七、踊るときはいつも清潔に
  - 八、ながら踊りはやめよう
  - 九、初心者には特に親切に
  - 十、踊ったあとの協力を
- 以上が十ヶ条です。
- 指導者の指示に従って、整然と踊っている姿は本当に美しいものです。文化祭で、美しいフォークダンスを披露できるよう、皆が仲良く、心の眼を開いて、豊かな体験を積んでいきたいものです。

## 短歌を楽しむ会

木庭 和子

文化協会発足と同時に開かれた、この講座も二十有余年。初代会長の永田喜一郎氏も『自家集』をつくる意気込みで参加されましたが、志半ばで逝去されました。

未だに歌集を出された方は、この会には居られません。でも、考えてみればやたらお金がかつて、時としてはた迷惑な歌集など出さなくても、年一度、発行される『層富』というありがたい存在があります。

記・紀以前から日本民族に馴れ親しんできた『五・七・五・七・七』のリズムに思いを込めて歌われていましたから、最もとりつき易い文学と云えましょう。

文化協会のモットーとして、地域の人々の相互勉強の場としての、この講座も寛先生御転居の後は、網干先生にお願して続けて参りました。

今年度の圧巻は、関大飛鳥研究所の設備を拝借しての第百五十回記念講座。御多忙の網干先生も御出席下さって、有意義で楽しいお話の数々……。例会終了後、好天にさそわれ、櫻の花ピラのチラホラ散る中を、あすか川

沿いにウスタキヒメ社の石段のあたりまで、そぞろ歩き。たぎち流れる川の瀬音はお喋りの伴奏……。この日の光景は、生涯忘れ得ぬ日の一コマとなり心に残りました。

## 簞作りの会

新司 輝江

講師のいない簞作りの会ですが、皆が知恵を出し合い、和気あいあいと続けています。

菓子箱を張り直したり、台所で必要な引き出しを作ったりで、美術作品と呼べる作品はありません。でも口と手は動いており、何時に間にか、それらしい作品は出来上がっています。

私もこれからは、気を引き締めて、美術作品を作る努力をして行きたいと思います。

毎月第二・第四月曜日 十時三十分～四時三十分

右京ふれあい会館

で、開いておりますので、よかつたらお越しください。

## 押花を楽しむ会

西田 安代

数年前、ふとしたきっかけで友人から「押し花を楽しむ会」に誘って頂くまで、私は押し花に対してほとんど知識がありませんでした。しかし、講師の廣崎先生に、花の摘み方から始まり、花の押し方、保管の仕方、そして、押しした花を作品に仕上げるまでの工程を詳しく教えて頂くうち、押し花の魅力にどんどん引き込まれていきました。そしてそれと同時に、花への見方も随分と変わったのです。

通い慣れた駅までの何気ない道や、買い物や散歩の途中、咲いている可憐で美しい草花に目がいくようになり、立ち止まって眺めながら、この花を押し花にして何か作ってみたいとあれこれ、考え、楽しむことが多くなりました。

そして最も嬉しいことは、花に対する愛しさが生まれたことであり、それは、今まで感じることのなかった新たな発見で、自分でも驚いております。

押し花との出会いは、私の人生を豊かにしてくれる素



第23回文化祭で一同（押し花を楽しむ会）

敵な出会いであり、本当に感謝しております。

今年の四月からは、月一回になり、個人個人の作りた  
い物を楽しみながら作っており、先生も時間の許す限り  
来て下さり、適切なアドバイスをして下さいます。

私達にいつも優しく教えて下さる廣崎先生と、押し花  
を通じて知り合った素敵な皆様に出会えたことを、とて  
も幸せに感じております。

これからも、月一回皆様と、和気あいあいと過ごす楽  
しい時間を大切にして、押し花作りをマイペースで続け  
て行きたいと思っております。

……歩く会

廣田 省吾

「……歩く会」は私にとっては窓口と云うより自分が  
歴史、地理等を勉強して、知識を吸収し、楽しく歩いて  
います。平成一七年度は左記のように歩きました。

● 葛城の道

四月二十三日（日）

前回、平成六年に歩いた道です。奈良には山の辺の道、  
中ツ道、下ツ道、筋違道（太子道）等々、一度は歩いて



葛城の道 高天彦神社前

平成5年4月23日

見たい魅力ある名前がつく道があります。此の葛城古道もその一つです。今回が始めて歩くと云う方々と、前回から十年ぶりに歩きました。

近鉄御所駅↓(バス)風の森峠下車↓高鴨神社↓菩提寺↓高天彦神社↓(史跡高天原)↓橋本院↓極楽院↓近鉄御所駅。  
(参加者十七名)

● 若草山山麓  
五月二十日(金)

(葛城古道の二回目。参加者少数の為、行き先変更)

東大寺裏から正倉院↓二月堂↓春日大社↓新薬師寺↓白毫寺  
(参加者一名)

● 桜井市東部  
六月二十六日(日)

近鉄大阪線大和朝倉駅↓舒明天皇陵↓鏡女王の押坂墓↓石井寺↓赤坂天王山古墳↓宗像神社↓桜井茶臼山古墳↓近鉄桜井駅  
(参加者九名)

● 桜井市東部の二回目  
十月二十一日(金)

● 東福寺から泉涌寺  
十一月十八日(金)

京阪東福寺駅↓泉涌寺↓考明天皇御陵↓今熊野観音寺↓近鉄京都駅

紅葉が美しい禅寺と皇室に深い縁があり御寺と呼ばれ



泉湧寺大仏殿前にて

平成17年11月18日



樫原南部、新沢千塚古墳で

平成18年3月3日

る泉涌寺、庶民の観音信仰の西国三十三カ所霊場札所を巡りました。

(参加者十七名)

● 檀原南部・(益田岩船) 平成十八年三月三日(金)

近鉄檀原神宮前駅↓新沢千塚古墳↓宣化天皇陵↓小谷古墳↓益田岩船↓真弓鐘子塚古墳↓牽生子塚古墳↓岩屋山古墳↓近鉄飛鳥駅

近鉄吉野線の東側が今話題になっている高松塚、キトラ古墳の反対側に六百もある小さな古墳群、更に謎の巨石益田岩船、驚きと頭をかしげながらの歩く会でした。

(参加者十七名)

……歩く会の窓口を引き継いで十一年大和の有名な古道、街道は歩いたようです。それぞれの道は季節の移り変わりや、又整備されたりして変わっています。それを見つげるために、再び同じ道を楽しく歩いて見たいと思っ

ています。

皆様のご参加をお待ちしています。

## 料理を楽しむ会

真中 礼子

子供が居る頃はお菓子を手作りしたり、献立に工夫を凝らしていましたが、独立して夫婦二人の生活になり、マンネリ化した手抜きが多い食生活になっていました。

そんな時「料理を楽しむ会」に誘って頂き、楽しく参加しています。栄養バランスや色どりも考慮されており、何よりも嬉しいのは私達の食事につながった献立で有る事です。

学生時代に戻った様にワーワーキヤーキヤーと賑やかに作っていると時のたつのも忘れ、上手に出来たと喜び、失敗して先生に叱られて落ち込んだりしています。めずらしい料理を覚えて家で再度チャレンジし、夫に「美味しいね」と誉めてもらうと、意欲も増し、料理レシピノートを新しくしました。回を重ねる度にレシピも増え、食卓は、器にも気を配り、ちよっぴり豪華になった様な気がします。

作っている時は頭をフル回転させ、体を動かし、楽しい会話と良い事づくめです。



「お料理上手ね」と言われる事を目標に、これからも頑張って続けて行くかと思っております。松村先生、よろしく御願ひ致します。新しいお仲間大歓迎です。

## 花風雅織同好会

倉内 喜江

私達織物同好会もやり始めてもう一年が過ぎようとしています。

昔から色々な織物が伝承されて来ましたが、私達同好会では「伝統手織」と呼んでいます。活動の出発がもつたいない精神で始めましたので、色々な着地・裏地を使つて「裂織」敷物、服、袋物にし、又気に入つた糸を使つて織物の巾を広げ、色、柄によつて作りたい物が変わつて来るので、次々と夢が膨らんで来ます。

毛糸では、折り方を変える事で、雰囲気の違ったマフラー等織る事もできます。麻混ではテーブルセンター・タペストリー等、色や糸の太さ、経糸、横糸の組み合わせで、思つてもみない良い物が織れたり、又反対にがっかりするような仕上がりになる事もあります。

織つた物が溜つて箱の中へと云う事もありますが、後日ふと思ひ出して、作品が完成するということもあつて、今後はあーしようか、こーしようかと作品をイメージして、糸や色、柄を考えるのが楽しみになってきます。そして織っている時は、無心になれるのがストレスの解消になるかも知れません。

## 表装の会

岩坪 昇

### 掛け軸の楽しみ方

表装の会に入り、軸を作り始めて四年になりました。

仏教伝来と前後して日本に伝わつた掛け軸。それを飾る場所として生まれたのが床の間です。最近床の間がある家も少なくなつた今、押し入れの隅に眠っている掛け軸を、リビングや玄関などに飾つてこそ、現代の「床の間」。日常の中でも季節を感じ、家族や親しい人と心の通う落ち着いた空間になると思います。

掛け軸は洋額のように、ずっと壁に飾っておくものではなく、「二期一会」の精神で、自分の思いを一幅に託し、

その都度掛け替えて楽しむ——それが手軽にできるのも、さつと広げられて、楽しんだ後は巻いてコンパクトに収納できる機能性があるからです。

作品を引き立て、同時に保護するのも表装の役目。後々仕立て直して再生できるように、作品や裂を裏打ちする和紙や糊も薄いものを使い、はがせるのが特徴。ものを最後まで大切に心が生かされています。

掛け軸は、その日、その人のために掛け替えることで生活にめりはりとうるおいを与える和のインテリア。

現代の空間で楽しむには、その主役である本紙も美術品のような書画だけでなく、いろいろなものを取り入れると身近に楽しめるでしょう。

本紙を引き立て、掛ける場所に調和させる役割をもつ裂地は、まさに本紙の衣服といえるもので、イメージをより深める裂を取り合わせることで、本紙の新しい魅力が引き出され、一般的に「巻く」という掛け軸独特の収納法に合うように作られた、表装用の裂が使われます。まず本紙の周りの中回しの裂を決め、次にそれに合う一文字、天地の順に選ぶのが基本。また、お気に入りの手持ちの古裂などを表具に生かしても、長い時間を経て生

まれた風合いと美しさが、侘び寂びの表現や新鮮さを添えてくれると思います。

素材は、絹、木綿、麻などを使いますが、取り合わせ方は着物に帯を合わせるのと同じで、フォーマルな本紙には格調高い織りの裂がふさわしく、染めの裂はカジュアルで軽やかな表情を演出したいときに、そしてモダンな空間には、すっきりとシャープな印象の無地や縞の裂を取り合わせると良いと思います。

## 詩吟の会

木村 麻子

今から二十年以上も前の若かりし頃、「詩吟教室」という小さな看板を初めて見た時、あ、もう少し年令をとってからするものだわ、と思ったものでした。

数年前、縁あって、当時九十才を越えて尚お元気で、生々としたお声で吟じ、教えて下さっていた吉本先生に導かれ、良き先輩方に囲まれ、励まされて、今日に至りました。

何のおけいご事でも、勉強でも同じでしょうが、入っ



詩吟の会

てみると、奥深く、又少ないけれど、子供さんや、若い方々もおられ、伸びやかに、大らかに、吟じられていると、地味な感じだけれど、お腹の底から声を出すことはとてもすばらしい事だと思われれます。

四行か八行の短い漢詩を通して、その時代や背景を想い、吟ずる……。それは又、コーラスで歌ったり、カラオケで演歌を歌うのとは、違った良さ、感覚がある様に思います。腹式呼吸で、身体にもよく、とにかく続ける事が大事と、仲間と楽しく、頑張っております。毎月第一、第三水曜日の午後一時十分より、平城西公民館に、どうぞお越し下さい。お待ちしております。

(真風流・西尾先生指導)

ビーズ・アクセサリーの会

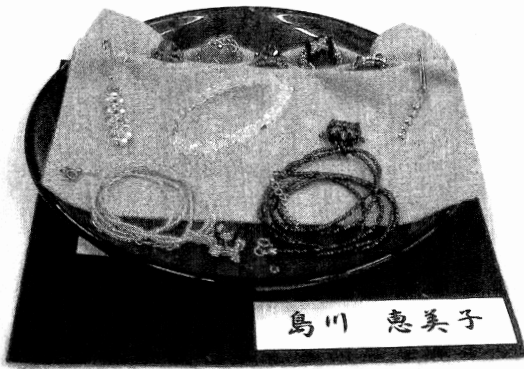
島川恵美子

平成十六年八月より、講師の住吉紀子先生のご好意で、毎月第一月曜日にふれあい会館での講座が始まり、受講させて頂くようになりました。

現在十七名で月一度のこの日を楽しみにしています。



住吉 紀子



島川 恵美子

ビーズはミリ単位、それで指輪やネックレス、ブローチ等を作るのですが、老眼鏡や拡大鏡のお世話になりながらの身には仲々思っ様にはいきません。

毎回作品のくわしい作り方や図面付きのプリントをもらつても、難しく、あちらこちらから「先生、ちょっと見て下さい」「私もお願いします」「こつちもお願い」との声に、先生は一時から五時までの間（六月から四時までに変更）、ずっと立ちっぱなしで各テーブルを廻り、丁寧に指導して下さいます。本当に申し訳ないと思ひ乍ら、私もつい「先生ー」と呼んでゐるひとりです。

こんなに細かく手間の掛るビーズ・アクセサリーですが、その分、出来上つた時の達成感、満足感は格別です。自分の分だけでも眼が痛くなりそうな、細かいビーズを家で作品ごとに小分けし、セツトして皆の希望に添うべく何色も用意して来て下さり、本当に感謝しています。出来上がった作品を見せ合ひ、「どう、このルビーの輝きは」「私のエメラルドもきれいでいいけれど、それも良いわね。」等と好き勝手な事を云ひ乍ら、皆の顔はちよつぷり、得意気です。

二年近く経つた今も難しく、ご迷惑ばかり掛けて居り、

本当に申し訳なく思つていますが、私の宝物がいっぱいになりますよう、この講座が、ずっと続くことを、願つています。

## 手踊り同好会

山内 梅乃

手踊り同好会発足以来講師を努めて頂いておりました毛利公子先生でしたが、ご主人の病氣療養のいかにもなくご逝去されました。謹んでお悔やみ申し上げます。

その間手踊り同好会は、山内が変わつてお世話させて頂きました。十七年七月に愛知万博で、「日本民謡祭り」というイベントがあり、その中に、「トヨタ夢音頭」という踊りがありました。私達も文化祭に向けてその踊りを練習することになりました。リズムに乗つて踊ることは気分転換にもなりすつきり致します。

現在は、夫々が習つてきたものを披露しあい、その中から皆で踊りを選びます。夏に向けて地域で開かれる盆踊りや、以前奈良国体で踊られた「鹿音頭」を練習しております。踊るのは疲れると思われる方は、椅子に座つ

## 第23回平城ニュータウン文化祭



手踊り同好会

て手踊りとして参加いただけます。自分流に即した稽古で楽しんでおります。一度覗いて見てください。

稽古日は毎月第一金曜日十時～十二時

場所は右京ふれあい会館

### マジック同好会

井上 雄司

### 文化祭を振り返って

恒例の文化協会主催の文化祭が北部会館で開催されました。文化協会には、マジック同好会として、登録している関係上、今回初めて他の同好会と同様マジックを上演いたしました。勿論、私一人では不安でしたので、四人の女性有志会員の協力を得て、上演いたしました。

昨今、テレビ等でよくマジックショウを見かけますが、会員の皆様にも関心があるのではと考え、文化祭で上演してはと声をかけましたところ、参加の声が上がり引き受けていただきました。大方の方はマジックが初めての方ばかりで、戸惑っておられたようで、勿論、見て頂いている皆様方も失敗しないかハラハラ・ドキドキではな

かったでしょうか。しかし、出演された皆様は、僅かの練習で堂々と演じられ、成功のうちに終わりました。お勤めした私としても、この上ない喜びでした。

マジックに限らず指先を動かすことは、認知症の予防にも最適だと云われています。また、上演した後の充実感、言い知れぬ喜びにもなります。

私の希望としては、覚えたマジックで、人を喜ばし、かつこれでボランティア活動に繋いで頂ければ、この上のない幸せです。また、来年も皆様と一緒に上演しようと約束して別れました。



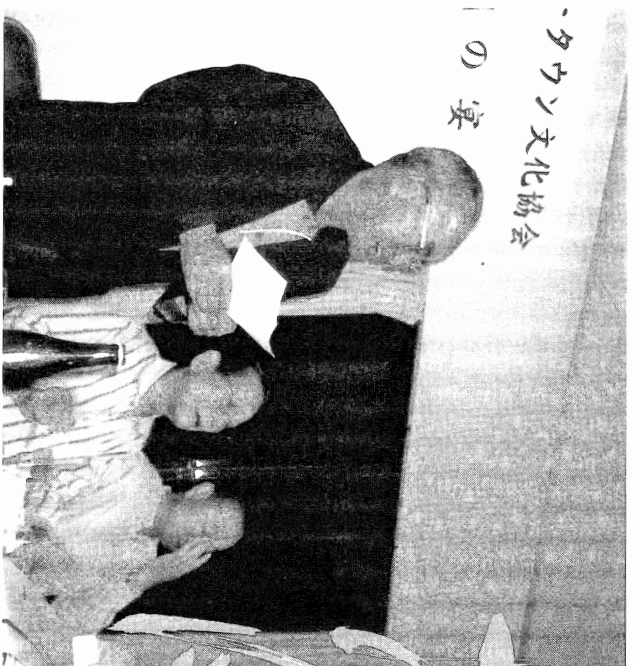
### 短歌 三首

佐佐木 信綱

願はくはわれ春風に身をなして憂ある人の門  
をとばばや

ゆく秋の大和の國の薬師寺の塔の上なる一ひ  
らの雲

秋さむき唐招提寺鷄尾しびの上に夕日は照りぬ山  
鳩の鳴く



平城ニュータウン文化協会  
の宴

10月16日

# 観月の宴



平城ニュータウン文化協会  
観月の宴



# 第23回平城ニュータウン文化祭



## 第23回文化祭記録

### 展示の部

◎ 日時 二〇〇六年十一月一日～三日

十時より十六時半

◎ 会場 北部会館文化ホール

◆ 絵画 上田 善次 大台 雅生 小西 淑彦

西村 通弘 山田ツル子 三木 昭夫

◆ 銅板 込山 博介 稲田 善彦 皆藤るみ子

レリーフ 杉田 英二 谷口早智子 岸下 啓子

中村 一郎 山田 正 近藤 昭英

藤沢 陽子 森本 幸雄

◆ 木夏文形 谷口 直子 網千佐和子 石森千代子

押絵 奥村 淳子 北アサ子 島田 守恵

杉村 環子 杉山 安枝 長柄 清子

東山 幹子 御手洗敦子 森本 登子

鷺塚 順子 西田 昌子 幸路 喜代

竹腰 清子 徳永美智子

◆ 短歌 網千 善教 石井 光子 大浦小枝子

岡田 越子 木庭 和子 玉置 小代  
馬場 恭子 松村せつ子 森田 陽子

◆パツアツ

打田 照子 樫原千鶴子 井本 市子  
吉川 尊子 若原 和子 菅 千尋  
住吉 紀子 新司 輝江 堀部 澄枝

◆ピース

新司 輝江 片岡 圭子 島川恵美子  
杉山 安枝 玉置 小代 馬場 恭子  
久本 美鈴 宮崎 滋子 森岡きみえ

山内 梅乃 若原 和子 住吉 紀子  
吉田 敬子 西田 安代 景山 光代

◆押し花

広崎 光子 伊藤 京子 宇野木久代  
若原 和子 鎌田 尚子 久本 美鈴  
岡田眞千子 奥谷 敏子 木村 絢子

鈴木 幸子 杉山 安枝 住吉 紀子  
西田 安代 野原 雅子 西本万優美

松村せつ子 御手洗敦子 山中優美子  
吉田 敬子 徳永美智子 景山 光代

◆軸装

西島 芳子 石井 栄治 岩坪 昇

水野 繁三 岡本 一枝 富田三千子  
吉田小夜子

◆花風雅織

倉内 喜江 山内 梅乃 新司てる江  
山元 洋子 八田 和子

◆管作り

秋山 静 新司 輝江 北村 源子  
岡田 越子 若原 和子 山内 梅乃

◆写真

赤坐 右一 伊藤 昌一 伊藤 嶺里  
大迫くき枝 皆藤 甫 菊地 俊一  
北原 吉雄 志智 英子 田中 利忠

◆園芸

寺嶋りくお 西口 義朗 野原 雅子  
北村 孫衛

◆地酒の会 写真・日本酒ラベル

◆書

田室 西崖 故 牧野 春駒 上田 善次  
俳句 牧野 和代 岡 良子 藤澤 慶子

上田千代子 周藤 智子 福井佐知子

大野佐智子 高柳 孝子 西田たまみ



手踊り同好会

橋本 友子

島川恵美子・松村せつ子

村上 寛子・新司 輝江・山内 梅乃

中西 敬子・山内 梅乃

松村せつ子・岩崎 恭子・石井 光子

村上 照・宮崎 滋子

木村有美子・小山マサ子・島本 敏子

湯川 博子・森岡きみえ

高岡 文子・熊田てる子・鈴木 時子

岡田 越子・小山マサ子

堀田 幸子・中務 明美・高松美枝子

舞踊「祝賀の舞」

久門 冨美

西尾 弘子・大浦 貞子・木村 麻子

長唄「秋(春・秋より)」 山内 梅乃(岩井 梅香)

6) フォークダンス 一五時四〇分 フォークダンスの会

大和楽「花だより」 村上 照(岩井 照香)

曲目

4) マジック 一四時三五分 マジック同好会

1) キャプテン ジンクス(アメリカ)

井上 雄司・岩井 静栄

2) フレンドシップ、ミクサー(アメリカ)

堀田 幸子・畑野 弘子

3) ルンバ、ミクサー

岡田 越子・西脇 岑子

4) ホットタイム、ミクサー(アメリカ)

5) 英語で歌いましょう 一五時十分 初級・中級英語講座

5) キャトル、コール、ワルツ(アメリカ)

「A Miller and a King」

宮川恵美子

曲目

岩崎 恭子・岡田 越子・片岡 圭子

「Green Green Grass of Home」

住吉 紀子・玉置 小代・徳永美智子

「Diana」

馬場 恭子・松田 輝子・松村せつ子

「Grandfather's Clock」

宮崎 滋子・森岡きみえ・山本 和子

湯川 博子・若原 和子

2006年(平成18)年度  
第24回平城ニュータウン文化協会総会

と き 2006年6月3日(土)

受付 午後1時より

開会 〃 1時30分

ところ 北部会館3F

◇平城ニュータウン文化協会総会次第 午後1:30~2:15

I 開会の辞

II 会長挨拶

III 来賓祝辞

IV 議長選出

V 議 事

- 1) 2005年度事業報告
- 2) 2005年度会計報告・監査報告
- 3) 2006年度役員改選
- 4) 2006年度事業計画(案)
- 5) 2006年度予算(案)
- 6) その他

VI 閉会の辞

---

◇第24回総会 記念講演 午後2:30~

『飛鳥の古代寺院の瓦』

講師 平良 良雄先生

(檀原考古学研究所主任研究員)

## 2005年度事業報告

地域住民の方々と交流、親睦を通じ地域文化の発展に努めました。

ニュース・「層富」・協会報は順当に発行されました。各戸配布の協会報は例年通り自治会各位の協力により、各戸に配布されました。感謝申し上げます。

北部会館会議室と市民ホールを使用して、総会記念講演・文化祭・文化祭記念講演・セミナー・各公開講座も盛況でした。

北部会館との共催事業、運営など今後の課題となりました。

- 2005年4月1日 ニュース1号発行  
29日 右京地区歓送迎会参加  
5月22日 第23回（2005年度）総会  
記念講演『最近の大和考古学の話題』  
講 師 網干 善教先生  
6月1日 ニュース2号発行  
10日 「層富」編集委員会  
12日 セミナー「吉野の歴史的風土」 講師 野崎 清孝先生  
7月1日 「花風雅織」講習会 講師 倉内 喜江先生  
15日 常任理事会  
8月1日 ニュース3号発行  
31日 「層富」編集委員会  
9月9日 文化祭展示の部 打ち合わせ会  
10月1日 協会報発行 全戸配布  
ニュース4号発行  
6日 文化祭上演の部 打ち合わせ会  
16日 観月の会  
30日 協会誌「層富」第22号発行  
11月1～3日 文化祭開催  
文化祭展示会  
絵画、銅板レリーフ、短歌、俳句、園芸、地酒、織物、筥作り  
写真、表装、ビーズアクセサリー、押し花、パッチワーク  
2日 中国語体験講座 講師 松村 如洋先生  
3日 記念講演「高松塚、キトラ古墳の壁画の意味」講師 網干 善教先生  
3日 文化祭上演会  
詩吟、日本舞踊、箏曲、英語講座、英語で歌いましょう、マジック、  
フォークダンスの会  
12月1日 「層富」編集委員会  
2006年1月1日 ニュース5号発行  
15日 平城ニュータウン「新春を祝う会」参加  
2月1日 ニュース6号発行  
10日 公開講座「歌声サロン」講師 小島 順先生  
3月26日 理事・常任理事会

# 2005年(平成17年)度決算報告

平成17年4月1日～平成18年3月31日

【収入の部】

(単位、円)

項 目	予 算	実 績	増 減	備 考
前年度繰越金	139,575	139,575	0	
会 費	495,000	469,500	△25,500	@1,500×313人
後 援 費	70,000	70,000	0	各自治連合会、自治会
戻 入	0	3,000	3,000	助成金戻(山歩きの会)
寄 付 金	10,000	30,000	20,000	講師お礼戻り(総会・文化祭・セミナー)
雑 収 入	425	2,807	2,382	書道講座1800・観月会1006・銀行利息
合 計	715,000	714,882	△118	

【支出の部】

項 目	予 算	実 績	増 減	備 考
事 業 費	150,000	132,500	△17,500	文化祭、セミナー等
助 成 金	84,000	72,000	△12,000	24講座(16年度はなし)
会 議 費	20,000	4,140	△15,860	会議、資料、他
広 報 費	300,000	296,115	△3,885	会誌、会報、ニュース
事 務 費	10,000	11,998	1,998	事務用品、他
印 刷 消 耗 費	100,000	78,750	△21,250	コピー機消耗品
通 信 費	3,000	1,620	△1,380	郵送料
渉 外 費	10,000	19,199	9,199	協賛費他
雑 費	20,000	1,680	△18,320	項目にない出費
予 備 費	18,000	0	△18,000	
積 立 金	0	0	0	特別会計繰り入れ
小 計	715,000	618,002	△96,998	
次 期 繰 越 金		96,880	96,880	
合 計	715,000	714,882	△118	

特別会計 南都銀行スーパー定期 ¥395,798(平成16年3月現在)

備 品 コピー機一台 LEODRY2540(第2団地2階中会議室に設置)

会計監査報告

平成16年度の、会計帳簿、証票類他関係書類等を精査した結果適正であることを認めます。

平成16年度 4月 20日

監 事 東 叡 (印)

” 西 村 美佐子 (印)





## 2006年（平成18年）度予算

【収入の部】

(単位、円)

項 目	金 額	備 考
前年度繰越金	96,880	
会費	450,000	@1500×300人
後援費	70,000	各自治連合会、自治会より
雑収入	1,120	銀行利息他
合 計	618,000	

【支出の部】

項 目	金 額	備 考
事業費	150,000	文化祭、セミナー他
助成金	75,000	@3000×25講座
会議費	10,000	会議、資料、他
広報費	250,000	会誌、会報、ニュース他
事務費	10,000	事務用品
印刷、消耗品費	80,000	印刷機器消耗品、コピー
通信費	6,000	郵送料
渉外費	10,000	協賛費等
雑費	5,000	各項目に該当しない必要経費
予備費	2,000	
積立金	20,000	
合 計	618,000	

## 講 座 ・ 同 好 会 一 覧

	定期講座・同好会	担 当 者	☎71局	曜 日 ・ 時 間	予定会場
1	歴史教養講座	網 干 善 教	6510	第2火曜日(10時～12時)	北部会館3F会議室2・3
2	万葉集講座	松 岡 禮 一	2964	第1水曜日(13時半～15時半)	北部会館3F会議室2
3	先史学講座	泉 拓 良 問合せ 山内梅乃	1654	第3金曜日(15時～16時半)	右京ふれあい会館
4	読 書 会	問合せ 山内梅乃	1654	第4金曜日(10時～12時)	右京ふれあい会館
5	英語講座 初級	橋 本 友 子	0395	毎月曜日(9時半～10時半)	右京ふれあい会館
	英語講座 中級			毎月曜日(10時半～11時半)	
6	中国語同好会 初級	松 村 如 洋	9605	毎木曜日(9時半～10時)	北部会館 会議室
	中国語同好会 中級			毎木曜日(10時半～12時半)	
7	俳句入門 (平城山句会)	牧 野 和 代 問合せ 西田たまみ	1777 1922	第2木曜日(13時～16時)	平 城 院
8	短歌を楽しむ会	網 干 善 教 問合せ 木庭和子	6510 3494	第3火曜日(13時半～16時)	北 部 会 館
9	絵 画 の 会	問合せ 大台雅生	72-0456	第1・3火曜日(10時～12時)	北部会館3F多目的室2
10	写 真 同 好 会	寺 沢 り く お	090-4640- 7316	概ね月2回日曜日、ニュースで通報	北部会館2F老春の家
11	… … 歩 く 会	広 田 省 吾	0207	奇数月第3金曜日偶数月第4日曜日	野 外
12	園 芸 の 会	北 村 孫 衛	0823	第4木曜日(13時～16時)	右京4-1-7-5
13	詩 吟 の 会	吉本音市・西尾弘子 問合せ 花田清美	5036 2787	第1・3水曜日(13時～16時)	平城西公民館
14	手踊り同好会	山 内 梅 乃	1654	第1・2金曜日(10時～12時)	右京ふれあい会館
15	押し花を楽しむ会	廣 崎 み つ 子 問合せ 若原和子	0774-73-0702 72-2508	第1木曜日(13時～16時半) 第4水曜日(10時～16時)	北部会館3F多目的室2 右京ふれあい会館
16	表 装 の 会	西 島 芳 子	72-0335	第2・4木曜日(13時～16時半)	北部会館3F多目的室2
17	料理を楽しむ会	松 村 せ つ 子	9605	第3木曜日(10時～12時)	平城東公民館料理室
18	銅板レリーフ同好会	問合せ 皆藤るみ子	2960	第1・3金曜日(13時半～16時)	平城西公民館
19	パッチワーク研究会	打 田 照 子	2879	第2・4金曜日(13時～16時)	右京ふれあい会館
20	宮 作 り の 会	問合せ 山内梅乃	1654	第2・4月曜日(10時～16時)	右京ふれあい会館
21	地酒を味わう会	問合せ 鈴木昭弘	1690	ニュースで通報	
22	フォークダンスの会	宮 川 恵 美 子 問合せ 玉置小代	0066	第1火曜日(13時半～16時) 第3木曜日(13時半～16時)	北部会館3F多目的室1
23	古文書を読む会	石 川 恒 久 問合せ 山岡梅乃	1654	第2・4土曜日(10時～12時)	右京ふれあい会館
24	ピースアクセサリーの会	住 吉 紀 子	1699	第1月曜日(13時～17時)	右京ふれあい会館
25	マジック同好会	出 口 幸 男 世話人 井上雄司	5236	第2土曜日(13時半～15時半) 第4金曜日(9時半～12時)	平城東公民館
26	花風雅織同好会	倉 内 喜 江	1850	第3月曜日(13時～16時)	右京ふれあい会館
27	歌 声 サ ロ ン	小 島 順	5651	第2金曜日(10時～12時)	北部会館3F多目的室1

# 会 則

## 第一章 総 則

第一条 この協会は、平城ニュータウン文化協会という。

第二条 事務局は、平城西公民館に置く。

## 第二章 目的及び事業

第三条 会員の研究・創作発表、知識の交換並びに会員相互間及び他の文化団体との連携提携の場となり、相互文化に関する進歩普及をはかり、地域文化の発展に寄与することを目的とする。

第四条 前項の目的を達成するために、次の事業を行う。

1 講演会・研修会・展覧会・発表会・文化講座等の開催。

2 関連文化団体との連携及び協力。

3 研究の奨励及び研究業績の表彰。

## 第三章 会 員

4 会誌の発行。

5 その他目的を達成するために必要な事業。

第五条 平城ニュータウンに在住又は勤務する者で、協会の目的に賛同する者とする。会員の種別は次のとおりとする。

1 正会員 年間会費一、五〇〇円

但し、高校生五〇〇円

2 賛助会員 この協会の趣旨に賛同する者で、年間会費五、〇〇〇円以上納める個人又は団体とする。

二、会員の更新手続きは不用とするが会費は総会後三ヶ月以内に納入のこと。

但し、二年間会費納入なき場合は退会と見做す。

## 第四章 役 員

第六条 協会にはつぎの役員を置く。

会長一名、副会長三名、常任理事若干名、

事務局長一名、事務局次長一名、会計一

名、理事若干名、監事二名。

第七條 理事は、正会員中より選出する。

二 会長、副会長、常任理事は理事の互

選で定め総会の承認を得る。

三 事務局長、事務局次長、会計は理事

中より会長がこれを選任し、総会の

承認を得る。

四 監事は会員中より二名選出する。

第八條 会長は協会を代表する。

二 副会長は会長を補佐し、会長事故あ

る時は代行する。

三 理事は理事会を組織し、協会に関す

る事項を審議し執行する。

四 常任理事は理事会の決定に基づき業

務遂行に当たるとともに、総会で決

議した事項を執行する。

五 事務局長は会務の遂行に関する理事

会、常任理事会等の決議に基づき全

般の事務連絡処理に当たる。

六 事務局次長は事務局長を補佐する。

七 会計は会計事務を処理する。

八 監事は会計帳簿を監査し、通常総会

において報告する。

第九條 顧問・参与を置くことができる。顧問・

参与は理事会の同意を得て会長が委嘱す

る。

二 顧問・参与は会議に出席して意見を

述べることができる。

第十條 役員の任期は二年とし、再任は妨げない。

二 補欠より選出された役員の任期は、

前任者の残任期間とする。

三 役員はその任期満了後でも、後任者

が就任するまで、なおその職務を行

う。

## 第五章 会 議

第十一條 理事会は必要に応じ会長が招集する。但

し、理事の三分の一以上から会議の目的

を示して請求のあったときは、理事会を

招集しなければならない。

二 理事会の議長は、会長又は会長の指

名する者とする。

三 理事会は理事の二分の一以上出席し  
なければ議事を開き議決することが  
できない。

四 理事会の議事は、出席理事の過半数  
をもって決し、可否同数のときは議  
長が決す。

第十二条 常任理事会は、会長、副会長、常任理事、  
事務局長、会計によって構成し、必要に  
応じ会長が招集する。以下理事会に準ず  
る。

第十三条 通常総会は毎年一回会長が招集する。

二 臨時総会は、理事会が必要と認めた  
とき会長が招集する。

三 総会の議長は総会出席者の中から指  
名する。

四 総会の議事は、出席者の過半数をも  
って決し可否同数のときは議長が決  
する。

第十四条 次の事項は通常総会に提出して、その承

認を受けなければならない。

- 1 事業報告及び収支決算
- 2 会計監査報告
- 3 事業計画及び収支予算
- 4 その他理事会において必要と認めた  
事項。

## 第六章 会計

第十五条 経費は会費並びに補助金、その他の収入  
による。

第十六条 会計年度は毎年四月一日に始まり、翌年  
三月三十一日に終わる。

## 第七章 会則の変更

第十七条 この会則は、総会の議決を得なければ変  
更することができない。

## 第八章 補則

第十八条 この会則施行についての細則は、理事会  
の議決を得て別に定める。

第十九条 この会則は昭和五十八年二月二十七日か  
ら適用する。



# 組織分担

「層富」編集部

部長

松岡禮一

行事部 部長

住吉紀子  
廣田省吾  
松村せつ子  
東村一  
赤坐右一

上田善次

赤坐右一

廣田省吾

西庭和子

廣田省吾

松岡禮一

廣田省吾

松岡禮一

松村せつ子

広報部部長  
文化祭上演部  
部長

梶野哲

配布部員  
神功地区 (廣田 省吾)

北川尚子

山内梅乃

第1団地

河村美智子

北村孫衛

1丁目

藤沢陽子

鈴木幸子

2丁目

福井佐知子

玉置小代

3丁目

木庭和子

花田清美

4丁目

谷口三枝子

宮村如洋

5丁目

酒井不二夫

宮川恵美子

6丁目

上田善次

毛利公子

右京地区 (山内 梅乃)

岩崎恭子

文化祭展示部  
部長

上田善次

第2団地

佐々木純子

赤坐右一

3丁目

飯田雅子

打田照子

山内梅乃

山下まこと

皆藤るみ子

相楽台

黒田節子

倉内喜江

左京地区 (久本 美鈴)

1丁目

久本美鈴

梶野哲

2丁目

喜多正恵

2丁目

北原昭子

3・4丁目

玉置小代

玉置小代

## 編集後記

◆嗟嗟悲哉。

ナント、哀シイコトデスカ。

去る七月二十九日 網干善教先生がご逝去されました。

三十一日にお通夜、そして、翌八月一日に永遠のお別れをいたしました。

たまらない気持ちです。言うべき言葉はありません。

今は、ただ、ご冥福をお祈りするばかりです。

◆連載の「すかたん近衛兵」嘆き節」も、とうとう最終回になりました。

あの「終戦の御詔勅」の場面が見事です。志摩の答志島で、その時には、何のお言葉か、全くわからない「御詔勅」を聞いた私には、ただ、ただ、感無量。

◆今回原稿の集まりが悪いので困りました。発行は、例年より遅れる、と思いましたが、印刷屋さんが「遅れ」を取り戻して下さいました。感謝しています。

◆会員の諸兄姉の、ご幸福と、ご健康を祈念いたします。

◆本日、第二十三号をお届け致します。【文責 松岡禮二】

編集委員

上田善次

木庭和子

西島芳子

廣田省吾

松岡禮一

山内梅乃